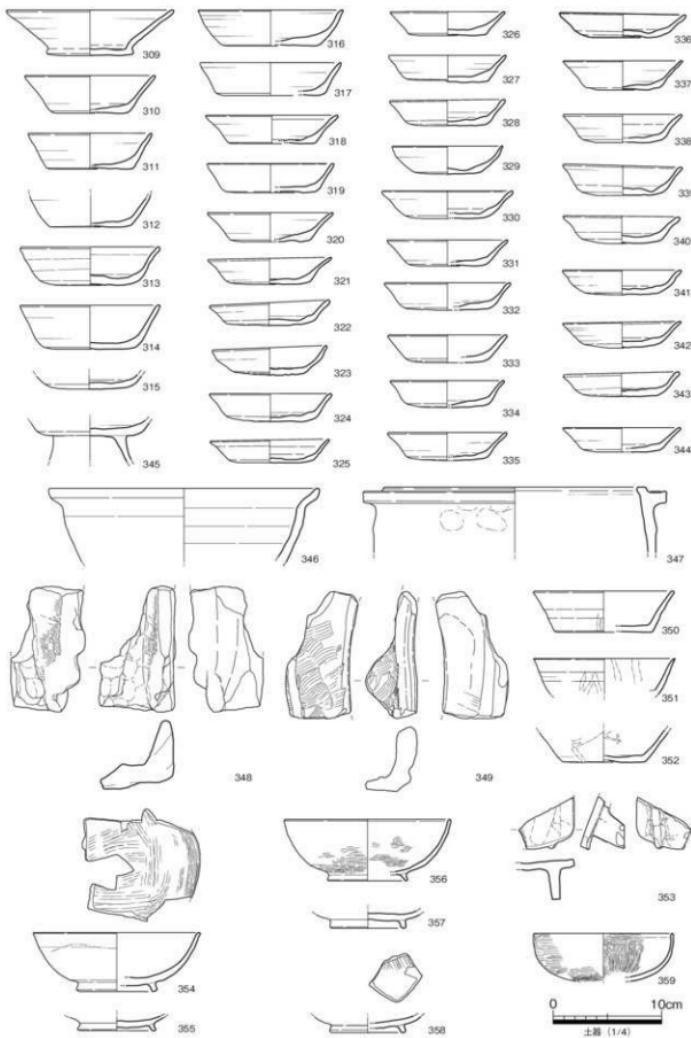


第74図 SD101 出土遺物実測図 1

⑪⑫間の断面では上層に大量の炭・焼土を含み黒色系土で埋没する。下層は炭・焼土を含まない砂層主体の堆積層で、上層は下層堆積後に再掘削したものである。この上下層区分は⑦区画におけるSD108との区分においても適用できる。溝SD108には炭・焼土を含まないが、その堆積土を切って掘開したSD101は炭・焼土を多量に含み、⑦以降には下層の砂層が認められない。のことからSD101の下層はSD108に接続しており、SD101上層を再掘削した段階で南にクランクした形状に変更したものと推定できる。

また、上層にはほぼ全域に炭・焼土を含むが、鉄滓等の鍛冶铸造関連遺物は④区画で特に集中して出土した。1区②に集中する鍛冶铸造関連構の残滓廃棄の場として位置付けられる。

出土遺物は⑩⑪区で出土した下層の遺物を先に報告し、次に上層及び⑪⑫以外で出土した土器を報告



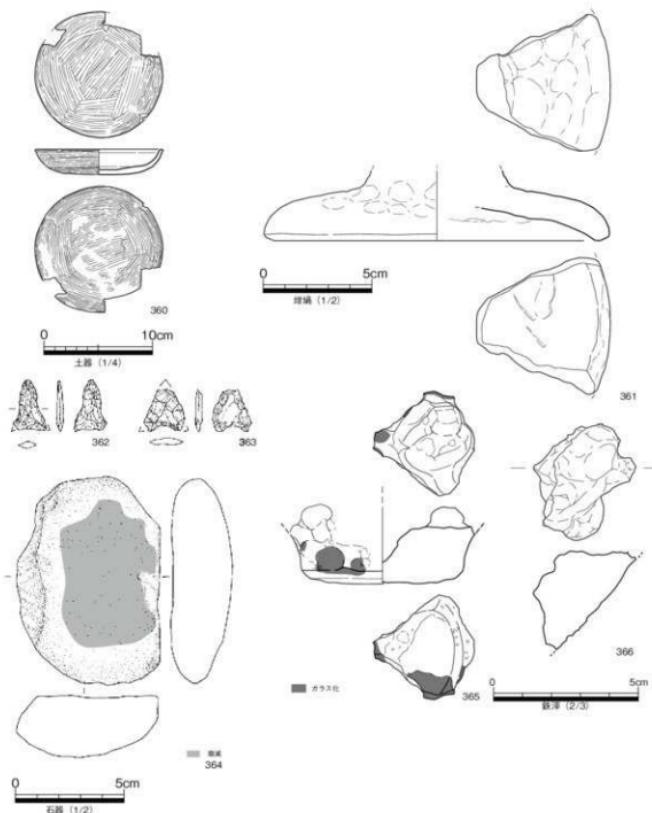
第75図 SD101出土遺物実測図2

する。

287～300は土師器杯で、287は回転台成形で円盤高台を有し底部はヘラ切り、体部が斜め上方に直線的に開く形態の杯である（杯A）。体部の開き方が小さく、上向きの形状を呈す。288～292は回転台成形で底部ヘラ切りし、口径に対して杯Aと同様の高さがあり、体部が斜め上方に直線的に開く形態の杯（杯B）である。杯Bは底面を平坦にヘラ切りするもの（杯B-1）と底部中央が丸く膨らむようヘラ切りするもの（杯B-2）があり、288～292はすべて杯B-2に属す。成形時、底縁部を丸く仕上げる意識が確認できる。293～295は回転台成形で底部ヘラ切りし、口径に対して高さが3cm以下と低く、中世の土師質土器小皿に近い形状の杯（杯C）のうち底面を平坦に仕上げる杯（杯C-1）で、口径が11.5cm以上の杯C-1-a（294・295）とそれ以下の杯C-1-b（293）がある。底縁部に稜線を有する特徴がある。296～300は杯Cのうち底部中央が丸く膨らむようにヘラ切りする杯（杯C-2）で、口径が11.0cm以上の杯C-2-aで占められ、口径がそれ以下の杯C-2-bは含まない。301は土師器碗である。回転台成形で底部をヘラ切り後に倒立し、断面矩形の高台を貼付して回転ナデにより仕上げる椀で、高台から体部下半へ丸味を帯びたカーブを介して立ち上がる形状（椀B）を呈す。内面の見込み部にはほぼ一方向へのヘラミガキがみられる。302は土師器の大形器種の底部に貼付された高台片である。裾径が15cm以上、高さ3cmで裾端に向かって細くなる長三角形形状を呈す。参考となる全形資料が当該地域には見当たらないが、同時期の灰釉陶器大形片口鉢の高台（百代寺窯156、広久手F窯138、松澤・河合1995）によく似ており土師器模倣の製品である可能性がある。303は土師器の移動式窯前面裾部片である。304は須恵器甕である。頭部がやや長く斜め上方に直線的に開いた後に僅かに屈曲して口縁に至り、回転ナデによりシャープに仕上げた口縁部は端部が下方に細く拡張する形状である。体部外面には格子叩きが残る。頭部形状は中世初頭の十瓶山窯跡群西村2号窯出土須恵器（澤井・六車1980の40）に類似し型式的にやや先行するものである。305は黒色土器A類の椀である。内面見込みに直交する単位の太いヘラミガキを施す。高台裾端は磨減して本来の形状をとどめていない可能性がある。体部下半が丸味を帯びる椀Bに属す。306は黒色土器B類の椀である。305と同じく体部下半が丸味を帯びる椀Bで内面は分割ヘラミガキを施す。307・308は黒色土器B類の托上椀である。体部下半が丸味を帯びる椀Bを基調として高台と体部の間に托を模した突帯を貼付する。托上椀分類では突帯が大きく外に張り出すa類と短く段状に張り出すb類に分けられ、307はb類、308はa類に属す。307の高台は托を模倣したもので、共存する土師器や黒色土器と比べ高く直立気味。内面は回転分割によるヘラミガキが顕著である。

次にSD101⑪は上層及び層位不明の出土遺物を報告する。

309～345は土師器杯である。いずれも底部はヘラ切り成形による。309は円盤高台の底部から斜め上方に直線的に体部が開く形態（杯A）。310～312は平底から屈曲して体部が斜め上方に直線的に開く深手の杯（杯B-1）、313～315は底部が丸味を帯び緩やかなカーブを介して体部に至る深手の杯（杯B-2）。316～329は平底で屈曲して体部が斜め上方に直線的に開く浅手の杯（杯C-1）のうち、316～321は口径11.5cm以上のもの（杯C-1-a）、322～329は口径がそれ以下のもの（杯C-1-b）である。330～344は底部が丸味を帯び緩やかなカーブを介して体部に至る浅手の杯（杯C-2）で、そのうち330～339は口径が11.0cm以上のもの（杯C-2-a）、340～344は口径がそれ以下のもの（杯C-2-b）である。345は高い高台の杯（杯E）である。346は土師器鉢で須恵器鉢と共通する器形を呈す。347は土師器土釜である。348・349は土師器移動式窯部材片である。350～352は須恵器杯であ



第76図 SD101 出土遺物実測図3

る。安定した平底から体部が屈曲して斜め上方にやや外反しながら開く形態で内外面に火捺が残る。9世紀後半から10世紀前半に属する個体で、混在品である。353は須恵器風字視の右観尻部分の破片である。平面長方形で直線的な右側縁の手前の隅は丸く折れ、手前の辺は緩やかに手前に膨らむ平面形を呈す。側面觀は観尻から観先に向けて大きく傾斜する。観本体の厚さは6~7mmで側縁は立ち上がりがなく平板状である。裏面には厚さ6mmの平板な粘土板を手前を台形状、奥を鍵状に切り取り、裏面の側縁から1cmほど内側に継長に貼付する（以下、「平板脚」とする）。器面は丁寧なケズリ調整で、観本体の側縁はナデによる細部調整を施すが、平板脚はそれを省略するためバリが残る。観面は顕著な磨滅がな

く平坦である。当該部位が硯央から右に外れたものとすれば、本品は大形となろう。焼成は良好で断面及び硯面はセピア系（暗赤褐色）、裏面は灰色系（黒灰色）を呈す。354・355は内墨の黒色土器A類の椀である。いざれも底部が平坦で体部にかけて丸味を帯びて立ち上がる形態（椀B）で、354は高台が厚く外に踏ん張る形態（椀B-a）、355は高台が小形で高台径7.0cm以上のもの（椀B-b）である。356～358は黒色土器B類の椀である。底部から体部へ丸味を帯びて立ち上がる形態で高台は大きく高台径は7cm以上である（椀B-a）。359は黒色土器B類の鉢とした。また360は同じく黒色土器B類の皿とした。椀以外の器種は稀で、359は椀に、360は杯に似た器形を呈すが、359は口縁部が内湾気味に直立する形態で体部下半の丸味が強く、椀とは区分するのが妥当である。また360も体部下半の丸味が顕著で杯とは一線を画する。両者とも内外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面のヘラミガキが359は縱方向の折り返しヘラミガキで暗文風の施し、360は内外ともに特徴的な五分割ヘラミガキを施す。後述するように高松平野東部以東で製作された可能性が高く、托上椀を含む黒色土器B類の器種分化が鉢・皿に至ったものと考えられる。361は厚さが1cmを超える厚手の蓋状の土器で断面が黒色で器面が黄灰色のやや軟質の土器である。上方把手部は軸芯復元6cmの中実で、体部が大きく開き、裾端が短く屈曲して内湾し端面を斜めに面取りする。器面の磨滅や剥落が激しく付着物は認められないが、鍛冶铸造関連の培塿蓋とみるのが共伴遺物や形状に整合的である。同様の例は奈良県山田寺跡铸造関係遺物（奈文研2002）や飛鳥池遺跡（奈文研1992）にあり、裾端の上述の形状は飛鳥池例によく似ている。

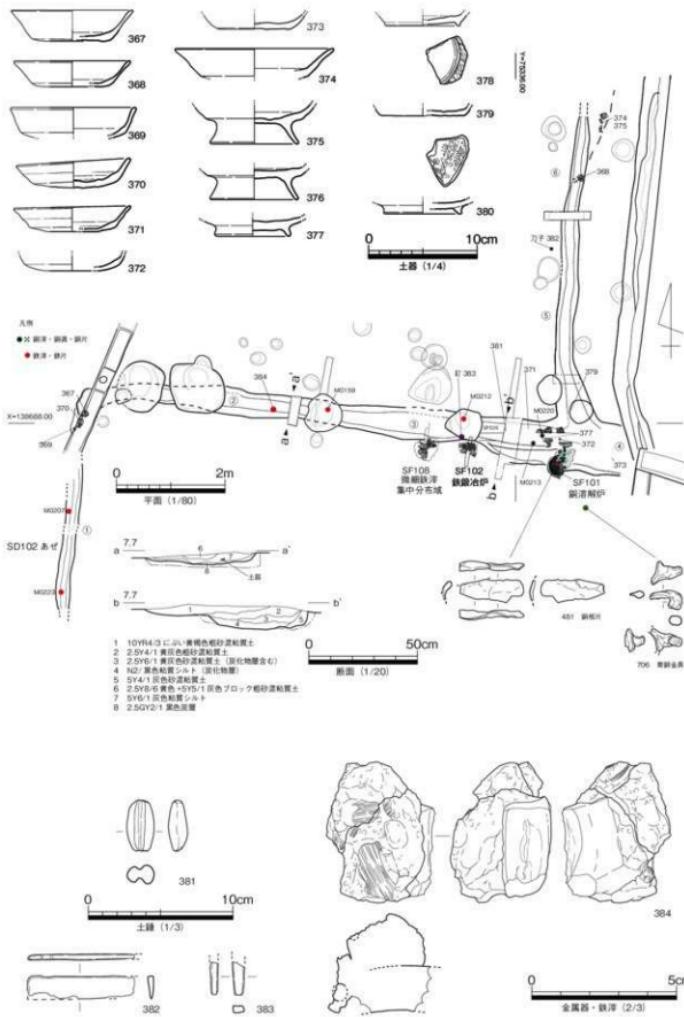
362・363は混在のサヌカイト製打製石錐である。364は器面が風化して脆弱となった磨石で弥生時代に所属する遺物の混在である。

365・366は鍛冶関連遺物である。365は底径5.6cmの円筒形で鉄錆状の鍛冶滓である。軽い質感で大小の気泡が認められる。底面の一部が被熱によりガラス化する。重量14.02gで裏面、側面に炉壁に由来する砂礫が付着する。磁着はしない。366（分析番号NIS-7）は軽い質感の鍛冶滓で、上面は炉材粘土の溶融物が流動化した滑らかな面が残る。重量は12.43g、裏面は僅かに磁着する灰褐色の鍛冶滓部分がある。以上の2点の鍛冶滓以外にも鉄滓は多く出土しており、合計18点を数える。うち14点が塊状鍛冶滓である。これらは重量で1g強の小形のものから、20g越えのものまであり、表面が鏽化または風化したものが多く、気泡があり、炉材の一部と推定できる砂礫が付着する。磁着は強弱の差があり、非磁着4点、弱磁着6点、磁着10点。13点が1区①西端の④エリアで出土し、残りは②区の⑪エリアで出土している。

鉄滓以外の鍛冶铸造関係遺物としては炉壁と考えられる多孔質被熱粘土が12点ある。⑥エリア下層で出土したM209（分析番号NIS-6）は科学分析の結果、灰褐色の鉄滓が付着する炉壁粘土と判明した。他はほとんどが④エリアで出土している。さらに通常より強固に焼き締まった焼土が4点出土した。うち3点が④で出土した。このように④で多く出土した鍛冶铸造関係遺物は1区②に集中する鍛冶铸造関連遺構における操業内容を反映するものである。

溝 SD102

1区②中央付近を逆し字状に区画する溝である。南端は浅く途切れるが精査による削出もあり、当初検出時にはもう少し南まで掘り形があった。東端は1区②東壁まで迫るが、その東は1区①と2区の調査区境の側溝に削られ平面プランは把握できていない。1区①北壁断面図（第37図）の5層はSD102上層に落ち込む「灰色包含層」である。写真等で確認すると5層下位には炭化物の多い層が含



第77図 SD102 実測図・出土遺物実測図

まれており、断面の西端から2m地点で途切れている。平面的には把握できていないが、SD102の東端を示しているものと考える。またSF101の北側で屈曲して分岐し約6m北まで直線で続き浅くなつて消滅する。

溝幅は場所によって異なるが概ね0.5m、深さは0.10～0.2mと浅い。埋土中に大量の炭・焼土塊が流入し（3・4・7・8層）、上層は中世遺構を除く第1遺構面全体を覆う整地堆積層（灰色包含層）で埋没する（1・6層）。堆積状況からみて南に接する銅溶解炉SF101、鍛冶炉SF102、鍛冶金床SF108は当該溝の機能中に存在した遺構で、溝内に炭・焼土が多く流入した要因である。銅滓や鉄滓・鉄片が出土しており、図にプロットしている。

溝SD102は建物SB102等建物を構成する柱穴との重複があり、SB102の説明で柱穴内に機物腐朽のため当該SD102埋土やその上位の灰色包含層が堆積した後に柱穴内に落ち込んだ状況がみられた。つまりSB102柱穴の柱抜き取りや埋め戻しのうち、長期の時を経ることなくSD102が作られ、さらに長期の時を経ることなく埋没するという時間的な連続性がうかがえ、調査区北部の中世遺構を除き、灰色包含層の下位に当たる遺構としては時期的に最も新しい遺構と判断できる。

さらに溝の配置を詳細に見ると、約10m南の溝SD101上層が当該溝SD102に対応するように Clarksonし、その西端では北への僅かな突出する形状を呈すことを先述したが、この突出はSD102西端の南への屈曲に対応するものと考えられるので、溝SD102とSD101上層は南北10m、東西7mを範囲する溝と評価できる。そしてこの範囲に後述する鍛冶铸造遺構・遺物が分布することから、鍛冶铸造作業場の区画溝として機能したものと推定する。

出土遺物は土器類、須恵器、黒色土器、土錘、鉄器、鍛冶铸造関連遺物（鉄滓・銅滓等）がある。367～376は土器器杯である。367は底部へラ切りで深手（杯B-1）、368は同浅手（杯C-1-b）である。369は底部が丸味を帯びる浅手で口径11.0cmを越えるもの（杯C-2-a）で370・371は口径がそれ以下のもの（杯C-2-b）である。372・373は杯底部片で形状から杯B-2または杯C-2に属す。374の口縁部は375の高台底部と同一個体の可能性が高く、376とともに杯Eとなる。377は土器器碗で碗B-aである。378・379は須恵器杯である。378は矮小化した高台を貼付し、379はヘラ切りの平底である。378は火燐が残る。380は黒色土器B類の碗である。高台が低い碗B-aである。381は有溝土錘である。長さ3.6cm、幅1.9cm、溝幅0.8cm、重量6.71gである。382は鉄器の小形刀子か。383は鉄釘である。384は多孔質で一部に厚さ15mmの厚手の土器片が貼り付く軽量の鉄滓である。木質・炭片などを多く含む。厚い土器片は炉壁または取鍋の可能性もあるが、外観では緑青など銅を示す成分はみられない。

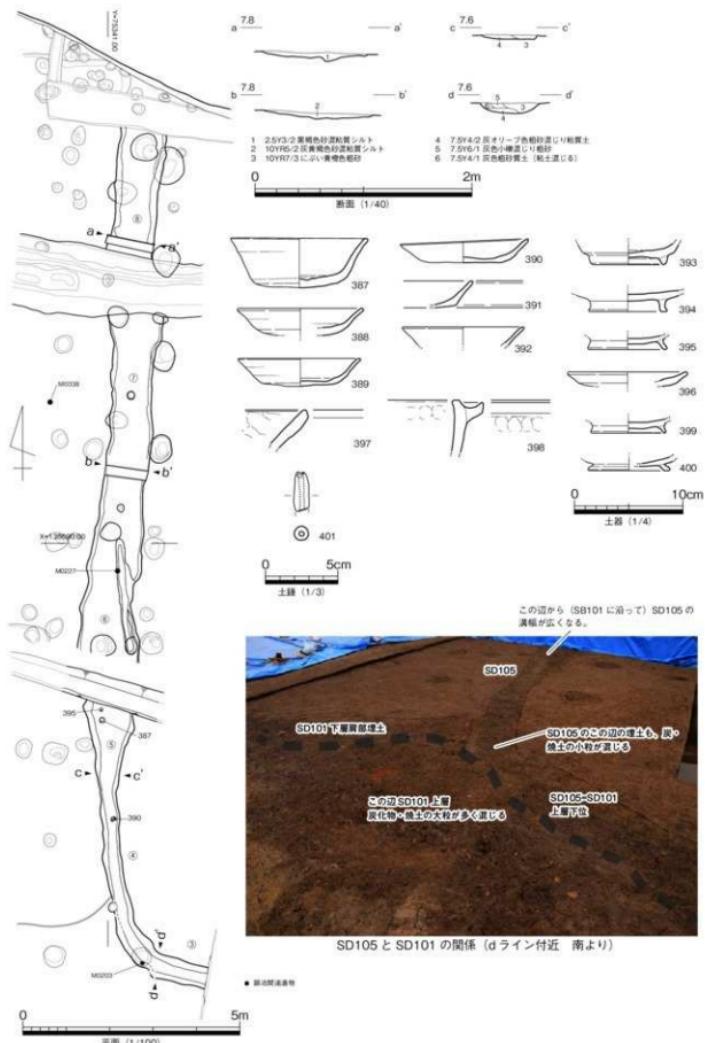
SD103

1区①で検出した東西方向の溝である。幅0.4～0.5m、深さ0.16mと小規模な溝で、SB106と重複し後出する。埋土は黄灰色系で炭化物粒が混じる。西端で南に屈曲して調査区外に延びる。溝底はaからdラインはほぼ平坦で、屈曲部より南のeラインが10cmほど高い。溝の西端が屈曲して南に延びる形状はSD102・SD107・SD112と共に共通する。

出土遺物は、385は土器器杯で杯C-1-bで小形化が進行する。386は土器器托である。杯部が斜め上方に内湾気味に立ち上がる形態で11世紀後半古相に比定される高松市西打遺跡II B2調査区SB01に類似があり、その小形品が11世紀後半新相の綾川町十瓶山西村遺跡N31・32のSD01で出土している。このことから当該遺構は11世紀後半古相に埋没した溝である。



第78図 SD103 実測図
・出土遺物実測図



第 79 図 SD105 実測図・出土遺物実測図



第80図 SD107 実測図

椀 B-c、400 は黒色土器 B 類椀の高台部片で椀 B-a に属し高台が大形だが、強く裾が外に踏ん張る形態はやや特異である。401 は小形の管状土錐片で孔径 0.3cm である。

以上の土器は土師器杯底部の丸味を帯びた形状が目立ち 11 世紀前半古相の前田東・中村遺跡 E 地区 SK04 に同時性を求められる。また托の体部形状が前述のとおりで 11 世紀前半古相の土器で占められる。遺構の先後関係及び上記の出土土器の位置づけから西村古代 3 期（11 世紀前半古相）に埋没した溝と考えられる。

SD107

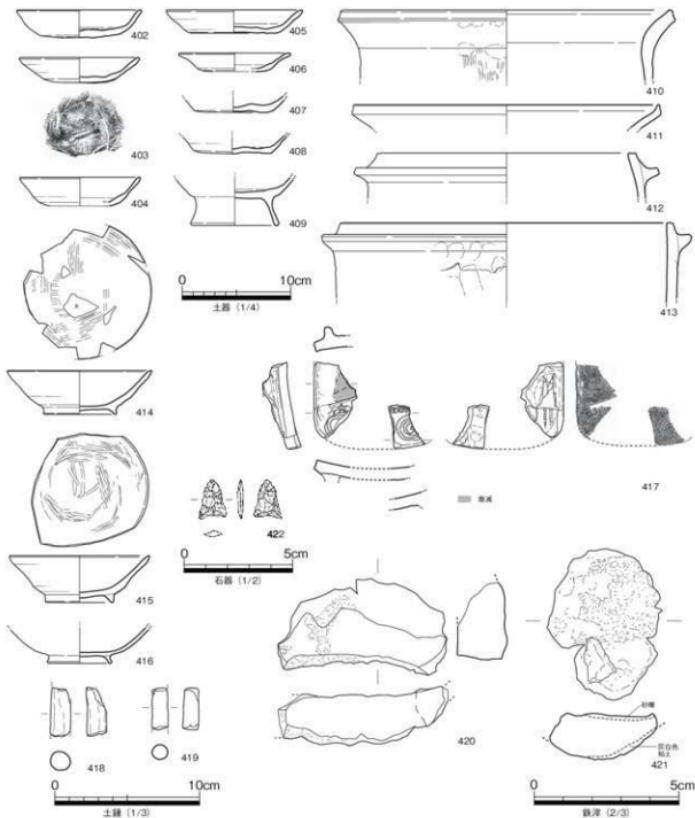
1 区③から 1 区②にかけて検出した東西方向の溝である。走向方向からみて建物 SB108・SB104 に伴う区画溝と判断できる。1 区③の西端で南に屈曲し、当該溝の掘り直しの溝 SD112 に切られる。また SD102、SD108、SB102 に切られる。

幅は 0.4 ~ 1.3 m、深さは 0.2 m、断面形は浅い皿状で、上下 2 層に分かれ、下層は褐色系で炭化物粒を少量含む砂質土層、上層は大粒の黄色粘土ブロックを多量に含む埋め戻し土で埋没する。1 区②ではその埋め戻し土が溝の範囲を超えて遺構面の一部を覆う部分的な整地土となる。この層は最大厚さ 15cm で、主に 1 区②中央部付近に存在し、調査時は第一整地層として調査した。1 区②の柱穴等の多くの遺構は、先述の灰色包含層を除去後、この整地層の上面で検出したものである。1 区②では整地土除去後にプランを検出して溝として調査したが、1 区③ほど明確な溝の平面プランの検出ができず、1 区②では幅広く浅い落ち込みのような遺構形状を呈すが理没土は 1 区③と等しい。

溝の各所で土師器・黒色土器が出土し、1 区②の上層埋め戻し土中から風字硯片が出土した。また風字硯の同一個体の破片が北東約 6 m の地点、つまり SB108 と併存時期が想定される SB104 建物範囲内で灰色包含層（調査資料では第一整地層としているが、写真等を点検すると SD107 埋土と共に通する黄色土ブロック混じりの整地層とは異なり遺構面全体を覆う灰色包含層で出土したものである）中で出土している。また、溝の主に東側で鍛冶関連遺物が出土した。出土レベルを点検するといずれも埋土上部であることから、埋没直前に投棄された遺物群と推定できる。

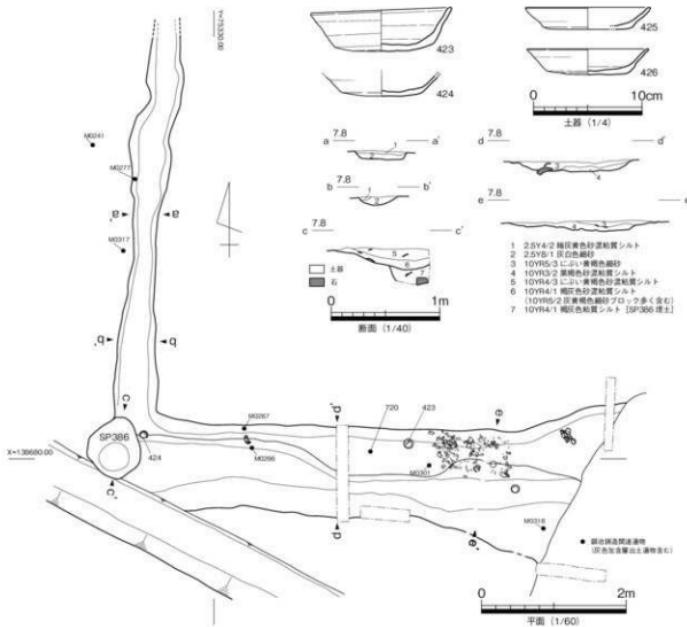
出土遺物は土師器、黒色土器、陶硯、土錐、鉄滓、石鐵が出土した。圓化したもののほか多孔質で砂礫が付着する塊状鉄滓 1 点と被然により表面が一部ガラス化した炉壁片と考えられる焼土塊 1 点が出土している。

402 ~ 409 は土師器杯である。402 ~ 404 は浅手の杯で底部が丸味を帯びる形態（杯 C-2-a）。405 はさらに浅手の杯（杯 D）。406 も浅手の杯で小形品だが灰白色粘土と黄橙色粘土が混じりあう在地土器にない胎土で、搬入品の可能性が高い。409 は体部が屈曲して斜め上方に立ち上がる形態の高台杯である（杯 E）。この形態の杯は体部上半が大きく開く形態が 11 世紀後半まで続くが、この土器は急角度で立ち上がっており古相を呈す。讃岐国分寺跡 SK26 出土土器に類例があり 10 世紀末に位置づけ（片桐 1992）られる。414・415 の黒色土器体部とはほぼ同形態・法量である。410 は土師器土鍋、411 は頭部を「く」字に外反させ口縁端部に上方に摘上する形態の土釜口縁部片である。412・413 は体部からそのまま口縁部に至る形態の土釜である。414・415 は黒色土器 A 類の椀である。断面三角形の大きめの高台から体部が屈曲して斜め上方に直線的に開く形態（椀 A）で、当地域の黒色土器出現期（森 1990）から続く形態である。416 は黒色土器 B 類の椀で高台径は 6cm ほどと小さい（椀 B-c）が体部が丸味をもって大きく広がる器形を呈す。417 は陶硯である。須恵質焼成の風字硯で、接合する 2 片と、非接合ながら



第81図 SD107出土遺物実測図

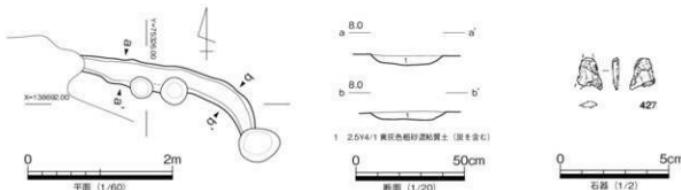
上面に施文された文様の特異性及び共通性から同一個体と認定できる破片1片で構成する。全体の1／3から1／4程度が残存するものと推定される。平面形は隅が緩やかなカーブを呈す綫長の隅丸長方形で、硯尻側全体の手前側、つまり陸側の構成パートである。現状で縦8.0cm、横7.0+a cm、本体厚さ1.0~1.1cmを計る。上面は中央が緩やかに窪む断面形状で、全面を丁寧なナデ調整で仕上げる。側縁はそのまま面取りしてやや強めのナデ調整で仕上げる。側板は残部位には付属しない。上面手前に細い工具によるフリーハンドの線刻で手前に同心円文、その奥に螺旋文を施文する。文様部から奥側中央部にかけて使用により上面が磨滅している。裏面手前側に左右1対の脚が折損・剥離した痕跡がある。痕跡



第 82 図 SD108 実測図・出土遺物実測図

から復元すると、長さは約6cm、基部幅は奥側で約1cm、手前側では約1.7cmと幅広く台形状となる。奥側15cmまでは脚下端が残存する。その部分の高さは0.9cmだが、手前側へ剥離痕跡が幅広くなることからみて、脚の高さも手前側がさらに高くなっていたものと思われる。残存部位から推定すると、脚部パーツは粘土板を大きな形状に仕上げた段階で本体裏面に接着用の縫傷を入れて貼り付け、その後ヘラ工具で脚部各面を削って仕上げ、面取りを施して面境の稜線を均す。なお、SD101出土の風字硯は脚部の平面形が長方形で、脚各面境は削ったまま稜線を残す形状であり、仕上げ方には相違がある。

418・419は棒状土錠片である。420・421は楕円形鉄滓である。420は炉底部を反映し厚さ1.7cmの鉄滓を形成する。近接箇所であるが2か所で出土した破片の接合である。分析の結果鉄酸化物と炉材粘土の溶融物からなる鍛錬鉄冶滓と判明した。421は底面に炉底粘土を一部取り込み、上面に炉壁崩落と思われる砂礫が薄く貼り付く。滓部は緑褐色を呈しガラス化する。重量は22.53gで磁着はない。図化していないが、多孔質で砂礫が付着する塊状鉄滓(M0206)は12.14gで磁着なし。被熱により表面が一部ガラス化した炉壁片と考えられる焼土塊(M0208)は0.87gで僅かに磁着反応がある。



第83図 SD110 実測図・出土遺物実測図

遺構の先後関係及び出土遺物から西村古代2期（10世紀後半）に所属し、3期にかけて埋没した溝である。

SD108

1区②で検出したL字状に配された条里方向に合致する溝である。東西部の溝幅は1.2~1.5mで1区①のSD101⑦下層から接続する。西端の屈曲部で時期的に先行する土坑SP386と重複し、SP386の有機物腐朽に伴う埋土の沈下により、SD108の埋土も周囲より5cmほど土坑内に沈下する。屈曲部から北へは最大でも溝幅0.5m、深さ0.1mと急に狭く、浅くなる。北端でSD107を切るまではたどれるが、その北はさらに浅くなり消失する。灰色包含層掘り下げ中に北1mほどの延伸を確認していたが、その後の上面精査で削られ、図化した範囲の検出にとどまった。建物SB105を区画する溝である。

埋土は大きく3層に分かれる。上層は北側a・bラインの1層の暗灰黄色シルト層で浅い部分のみ堆積する。中層は同2層及びd・eライン3層の灰白色～黄褐色系細砂層で南側の一段下がった部分に主に堆積する（特にdラインに顕著）。この中層は調査時に「上層」として遺物を取り上げている。そして下層はd・eライン4層及びcライン5・6層の粘質シルト層である。eライン付近では北から投棄された状態で遺存状態の良い土器の一群が出土した。

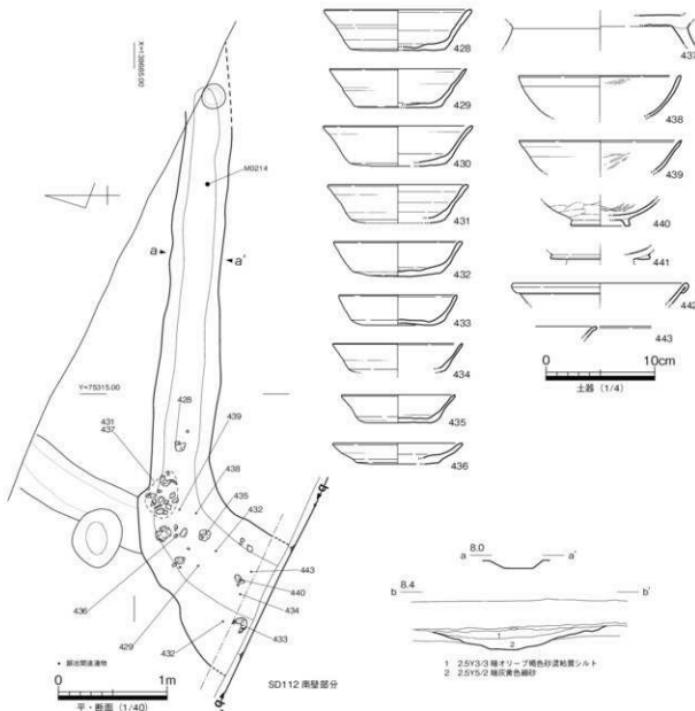
出土遺物は土器杯4点のみである。423・424は深手で底部が丸い杯B-2、425は浅手で平底のC-1-a類、426は浅手で丸味を帯びる底部の杯C-2-aである。

建物SB105に伴う遺構としての先後関係や出土土器から西村古代3期（11世紀前半古相）に埋没した溝である。

SD110

1区③で検出した矮小な溝である。幅最大0.3m、深さ0.1mで延長2.5m分を検出した。東西方向に直線的だが東端で緩やかに南に屈曲して浅くなり途切れる。周囲の建物方位に合致するので、いずれかの建物に伴う雨落溝または区画溝であろう。埋土は黄灰色系粘質土で炭化物粒を少量含む。所属時期を示す土器は出土しなかつたが、混在のサヌカイト製石鎌が1点出土した。

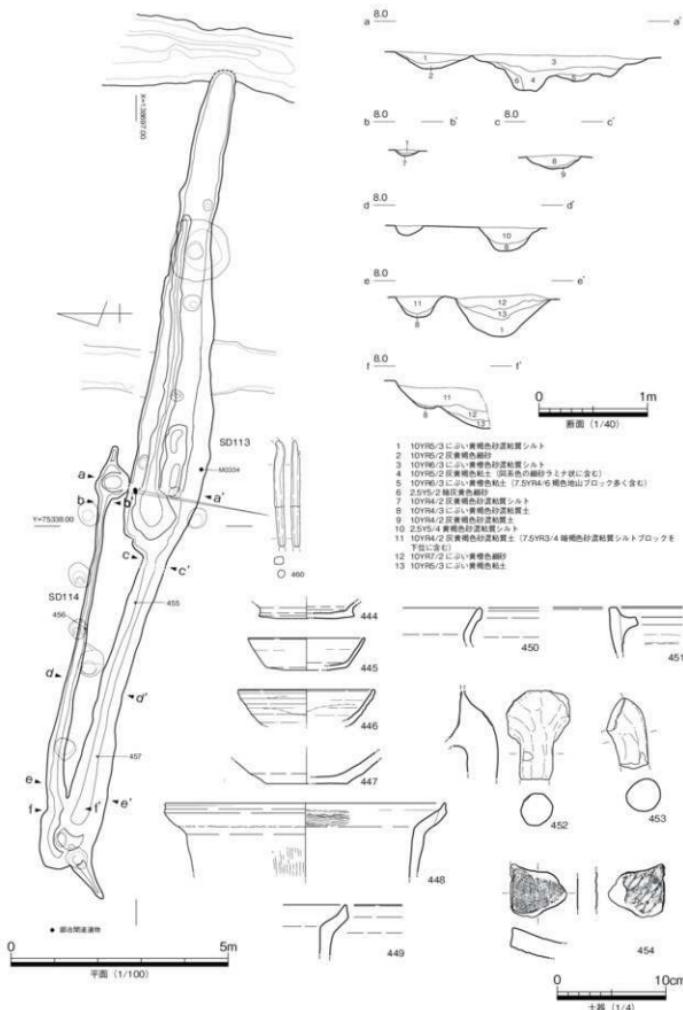
427は凹基式サヌカイト製の石鎌である。長さ2cmに満たない小形品で元来は弥生前期に属するものである。



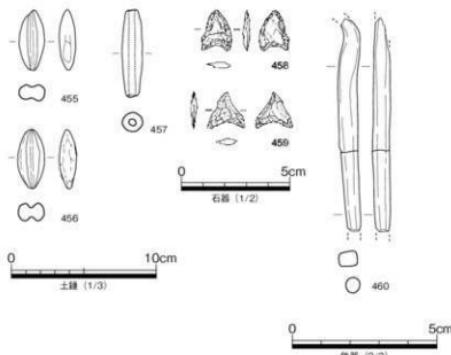
第84図 SD112 実測図・出土遺物実測図

SD112

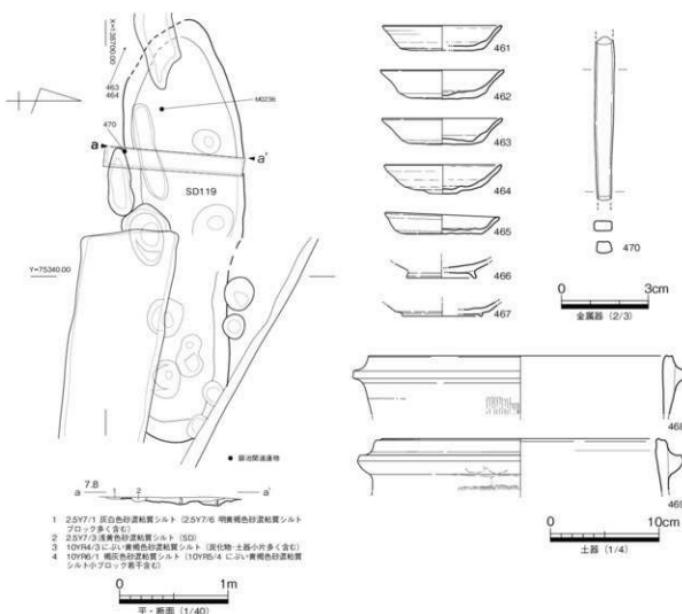
1区③南拡張部で検出した東西方向の溝である。東西4.5m直線で走行し、西端で緩やかに南屈曲して調査区外に外れる。幅は0.5m、深さ0.15～0.2mで西に深く南壁部分では0.3mの深さとなる。1区③調査では溝ラインを検出できていない。おそらく急に浅くなっていたものと考えられる。上層は茶色系シルト層、下層は灰黄色系砂で下層は主に西端屈曲部付近のみに堆積する。SD107とほぼ並行し、SD107西端屈曲部埋没後に開削されるので、SB108と関連するSD107の機能を引く継ぐものであろう。SB108の南には柱筋を合致させる柵列SA102がSD107埋没後に構築される。SA102はSB108に付属する部分的な南廻の可能性もある。特にSD107とSB108柱穴の距離はSD112とSA102柱穴の距離に等しいこととSD107とSD112が西端で同じ様に緩やかに南に屈曲していることの共通性から、SB108



第85図 SD113・SD114実測図・出土遺物実測図1



第86図 SD113・SD114出土遺物実測図2



第87図 SD119実測図・出土遺物実測図

に関係する新旧の遺構の組み合わせとして把握できる。

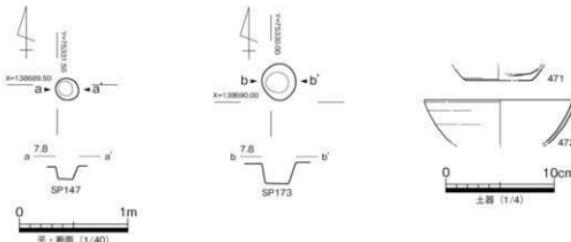
主に西端屈曲部付近で上下両層から土器が出土した。428・435・437・440・443が上層、それ以外は下層の砂層中から出土したものである。土師器、黒色土器、白磁、綠釉陶器がある。

428～436は土師器杯である。428～430は底部が平坦な深手の杯（杯B-1）、431・432は底部が丸味を帯びる浅手の杯（杯B-2）である。433～435は底部が丸味を帯びる浅手の杯で433・434は口径が11.0cm以上（杯C-2-a）、435は口径がそれ以下（杯C-2-b）である。436はさらに浅手の杯Dである。437は土師器の高台片である。底面の外側に回転糸切り痕を残す。SD101下層出土の302と同じく灰釉陶器大形片口鉢（百代寺窯式）の高台に法量・形態が類似する。438・439は黒色土器A類の椀である。いずれも薄手で438は体部がカーブし口縁は直口で外側が灰白色を呈す（椀B）。439は橙色で直線的な体部から口縁部が外反する（椀A）。440は黒色土器B類の椀で体部下半は手持ちハラケズリを行う。高台は小形で径も小さい（椀B-c）。441は黒色土器托上椀である。托部径は約9cmで突帯が痕跡的に突出するb類である。442是中国産白磁碗である。斜めに大きく開く体部に扁平な玉縁状を呈す口縁部がつく。玉縁は口縁を折り曲げて形成したことを示す接合痕が破断面に残る。器壁は25mmと薄く胎土は明白で緻密、精良。施釉はややくすんだ灰白色である。器形と法量から山本2000分類（太宰府市教委2000）の白磁碗I—4類にあたり、9世紀後半から10世紀中頃に属す。443は綠釉陶器椀の口縁部小片である。胎土は暗灰色を呈する須恵質で、釉は濃緑色を呈す。

遺構の先後関係及び出土土器の様相から当該溝は西村古代2期に埋没したものと考えられる。

SD113・SD114

2区の灰色包含層上面で検出した東西方向の溝である。複雑な形状だが、北側で細いSD114が先行し南側のSD113がそれを切る。SD113もa-cライン間で急に幅広く深くなる箇所を経て東に流下する。深さと層位関係を点検すると、SD113の西端eラインの溝底レベルは7.5mでSD113東側aラインに適用すると3層下面が同じレベルとなる。c・d・eラインとaライン3層はいずれも黄橙色～黄褐色系シルトで埋土も類似する。このことからSD113は東側のaライン4～6層が先行して掘開され、その後に西側に拡張されaライン上層の3層が機能したと考えられる。また、SD114はそれらに先行する溝と考えられるので、現段階ではSD114→SD113東側→SD113全体の順で機能したものと判断する。溝の機能は平面形状から北側の建物等に伴うものと考えられ13世紀前後の柱穴で構成する建物が調査区北側に埋没していると推定する。



第88図 柱穴 SP147・SP173 実測図・出土遺物実測図

土師器、土師質土器、瓦、土錘、石器、鉄器が出土した。444～453は土師器、土師質土器である。444・445は杯で444は円盤高台の土師器杯A、445はヘラ切りの底部から体部が強く屈曲して斜め上方に直線的に延びる形態で本報告の主たる時期から外れ、中世の土師質土器である。天王谷遺跡分類の杯匂a類にあたり、14世紀前半。446は同じく中世に所属する土師質土器椀である。口縁部外面に重ね焼きの黒化があり、さらに体部下半内外面が黒化する。十瓶山系須恵器に細部形態は類似するが、口径は12.5cmと椀の範疇に含まれない法量で近隣の例では金毘羅山遺跡II区SX11の14世紀の遺物に類例を求める。447は土師質土器鉢、448・449は土師器土鍋、450は土師質土器壺口縁部片である。13世紀に所属する。451～453は土師器土釜である。454は土師質の平瓦である。凹面布目、凸面は斜行する粗い繩タキが施される。側縁には当板痕が明瞭に残る。十瓶山窯跡群の西村・丸山等の11～12世紀の窯で生産される平瓦の特徴に等しい。

455・456は有溝土錘、457は管状土錘である。458・459はサスカイト製打製石鎧で弥生時代前期の混在。460は断面円形の棒状鉄器で上端はカーブを描き湾曲したところで破断する。湾曲部付近は断面が隅丸方形に仕上げる。下端がやや細いが、直径は0.5～0.7cmで鉄製馬具の金具である可能性が高い。

以上のSD113・114は複数の溝のために時間幅があるが、出土土器から12～14世紀の間に機能したもので、当該溝北側に存在が想定される中世の建物群のおおよその時期を示す。

SD119

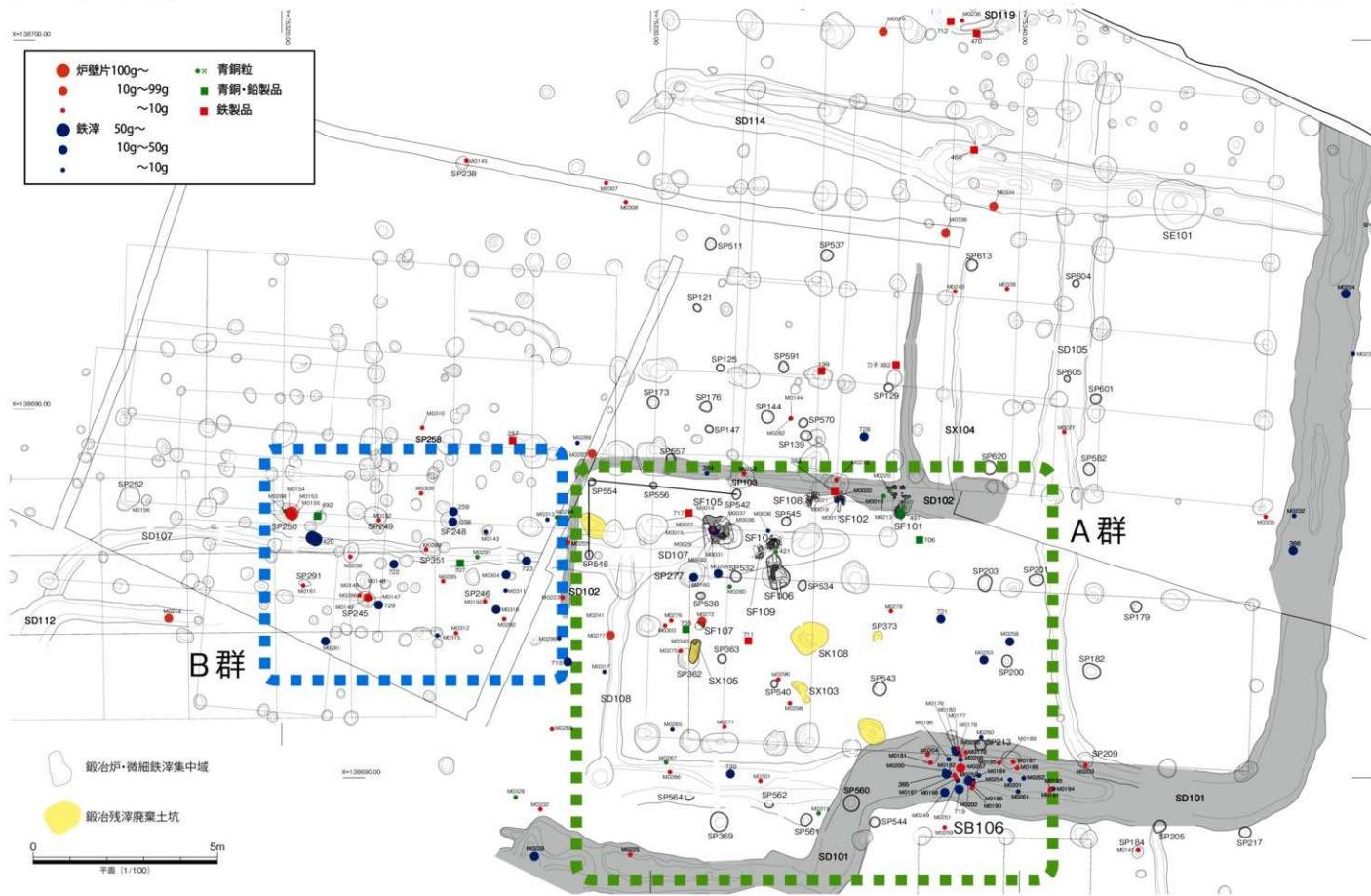
2区北側で検出した短く浅い溝である。長さ3.9m、幅1.1m、深さは0.07mを測り、主軸は東西から7度時計回りに振った方向で、掘立柱建物SB104の北東隅に対応し、その雨落溝の可能性がある。炭化物片を含む黄褐色系砂混じり粘質土で埋没しており、その上部を覆う灰色包含層上面から掘り込まれた中世以後の柱穴に大部分を切られている。同一法量の杯がまとめて出土していることから、地鎮遺構の可能性もある。

土師器、鉄器が出土した。461～465は土師器杯である。461は底部が平坦な浅手の杯（C-1-b）、462～464は底部が丸味を帯びる浅手の杯（C-2-a）、465はさらに浅手の杯（杯D）である。466・467は土師器椀高台部片である。いずれも高台は小形で椀B-cである。468・469は土師器土釜である。470は大形の鉄釘で、頭部が欠損する。

本遺構は建物SB104に伴うとすれば、西村古代2期（10世紀後半新相）に所属する。

（4）鍛冶鋳造関係遺構・遺物

1区②と1区③を中心として鍛冶鋳造関係遺構が分布する。1区②に分布する関係遺構及び関係遺物分布を鍛冶鋳造A群とする。A群はSD102とSD101上層に囲われた東西約10mの範囲の主に北側に溶解炉（SF101）、鍛冶炉（SF102・105～107）、金床（SF104・108・109）が所在し、南及び西に廐棄土坑（SX103・105・SK108抜き取り穴・SP372・SP373・SP162）がある。また、これらに近接して、先述の建物に組み合わない柱穴が鍛冶鋳造作業に関係する可能性があり、図にその分布を示した。このうちSD102の西北隅の屈曲部内側に逆一字形に並ぶ柱穴（SP548・554・556・542）はSD102の区画に伴う柵か堀であろう。それ以外の柱穴等は柱並びが不規則で、工房等の建物を復元することは困難である。これら鍛冶鋳造関係遺構の所属時期については、灰色包含層が遺構面全体を覆うことからその堆積以前であり、かつSF105・SF106がSB102・SB105所属柱穴埋没後の窟みを炉に使っていることと、各



第89図 鍛冶铸造関連遺構遺物分布図

期建物と近接しており同時併存が考え難いことから、この場所から建物がなくなった段階（西村古代4期）に鍛冶鋳造作業がまとめて行われたものと判断できる。

なお、遺物が出土した柱穴SP147・SP173について遺構及び出土遺物を提示した。471はSP173出土の土師器杯である。底部は平坦で体部は屈曲して斜め上方に立ち上がる形状で古代2期以前の混在である。472はSP147出土の黒色土器B類碗である。体部が曲線的なカーブを呈することから碗Bに所属する。これらの出土遺物は鍛冶鋳造関係遺構以前の遺物の混在である。

一方、1区③にも鍛冶鋳造関連遺物の分布がある。建物SB108の柱抜き取り後の埋没土中やそれに伴う区画溝SD107の最終埋没層に、鉄滓や銅片等が含まれている。これら遺物の分布範囲をB群とする。B群遺構は割り合いや層位関係からみてSD102等に開まれたA群の鍛冶鋳造関連遺構とは時期が異なり、SB112・SB108・SD107・SD112等の西村古代2期の遺構が発達した後の西村古代3期に相当する。

この範囲には比較的大型の鉄滓（椀状滓）があり、銅板片や青銅帶金具（巡方）など出土遺物もまとまっている。これらの遺物と関連する鍛冶鋳造遺構は今回の調査区内では位置づけられないが、調査区の主に南側等でこの時期（西村古代3期）の遺構が所在するであろうことが予想できる。なお、西村古代3期の建物はSD108・SD101下層で区画されたSB108やSB101であり、SD102等で開まれた鍛冶鋳造遺構群とは層位的な前後関係があるので、別時期であるのは間違いない。

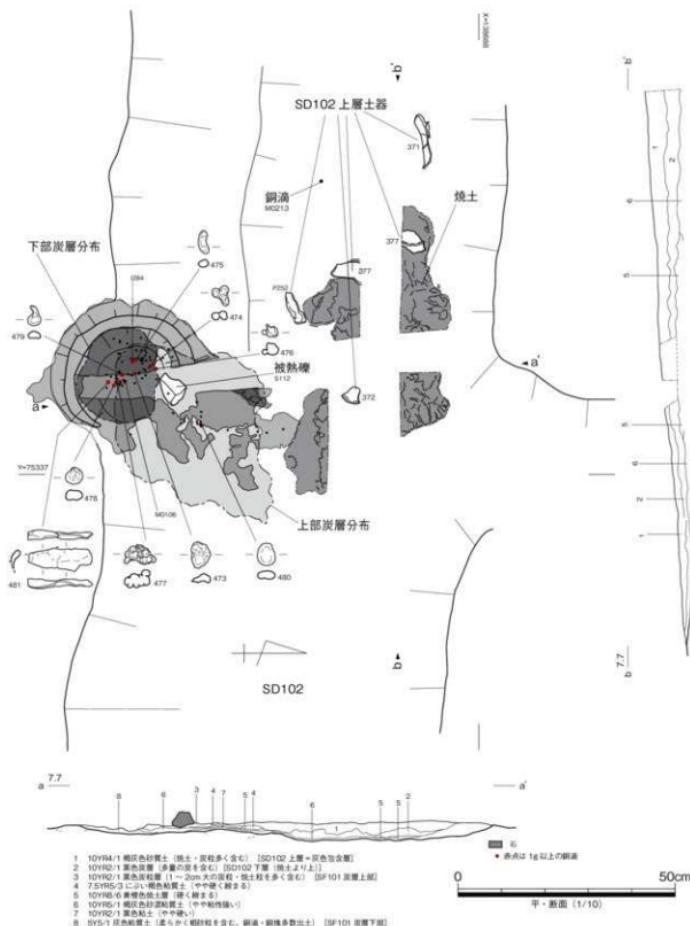
以下、1区②の鍛冶鋳造関連遺構・遺物をA群、1区③をB群として関係遺構を報告する。

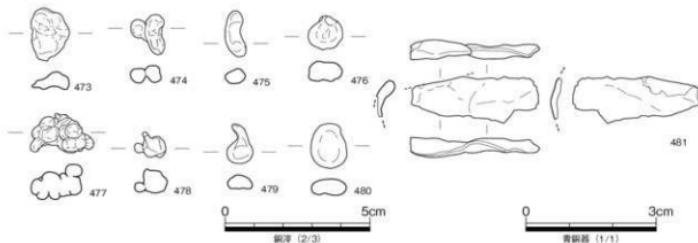
青銅溶解炉 SF101

A群、1区②の溝SD102東端に接して検出した溶解炉基部である。直径約35cmの範囲でドーナツ状に茶褐色系の硬化した砂質土が分布する。その内側は炭粒や焼土粒を含む上部炭化物層が堆積し検出当初は炭化物層が炉上面の大部分を覆っていた。少しづつ炭化物を除去して掘り下げる途中、薄い砂混じり粘質土が介在し、底面直上には軟弱で粗砂を含み、青銅粒を多く含む下部炭化物層があった。底面は茶褐色系で硬化した砂質土で中央部が僅かに窪む。

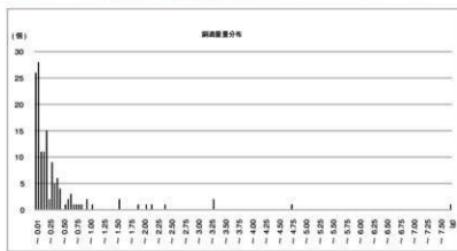
遺構の北側半分はSD102の南肩部にあたり、北東部の掘方がやや乱れてSD102側に崩れる。その部分からSD102床面にかけて焼土や上部炭層が分布し、わずかだが青銅粒もSD102側で若干出土した。このことから、溝SD102と溶解炉SF101は同時に存在したものと考えられる。

下部炭層で青銅粒597点、合計78g分が出土した。大きさは径0.5mm以下の小粒が圧倒的に多い。圓化した8点は473が変形で押しつぶされたような粒で他はいわゆる湯玉である。中でも477は多くの湯玉が融着した状態で出土したものである。479は滴下部を伴う湯玉である。このほか481は銅板片で炉内出土である。近くには小形の青銅金具（706）が出土しており、これらを鉛同位体分析しようと試みたが、分析が不可能なほど鉛の含有がなかった。化学組成分析を行った青銅粒は銅（Cu）が75%、錫（Sn）が23%に対して、鉛は0.015%と非常に低率の化学組成である（第5章第7節参照 分析番号NIS-13）。このような錫の比率が高い組成は高錫青銅と呼ばれ、融点が下がり湯流れはよいが、鋳造の際固結時に割れやすくなる。半島や大陸では古代からこのような高錫青銅に熱間鍛造を行うことで加工する技術があったが、日本には伝わらなかったとされる（三船 2010）。したがってこのような化学組成を示す青銅器は日本の古代の青銅製品としては特殊で、SF101で溶解原料となった青銅は船舶の青銅器（鉛の少なさから鏡より容器や杓子などの鍛造青銅器か）の可能性が高い。また多数の湯玉がこぼれ落ちているのは溶融加熱時に温度コントロールを失敗したことが要因とみられるが、このように錫が多い





第91図 銅溶解炉 SF101 出土遺物実測図

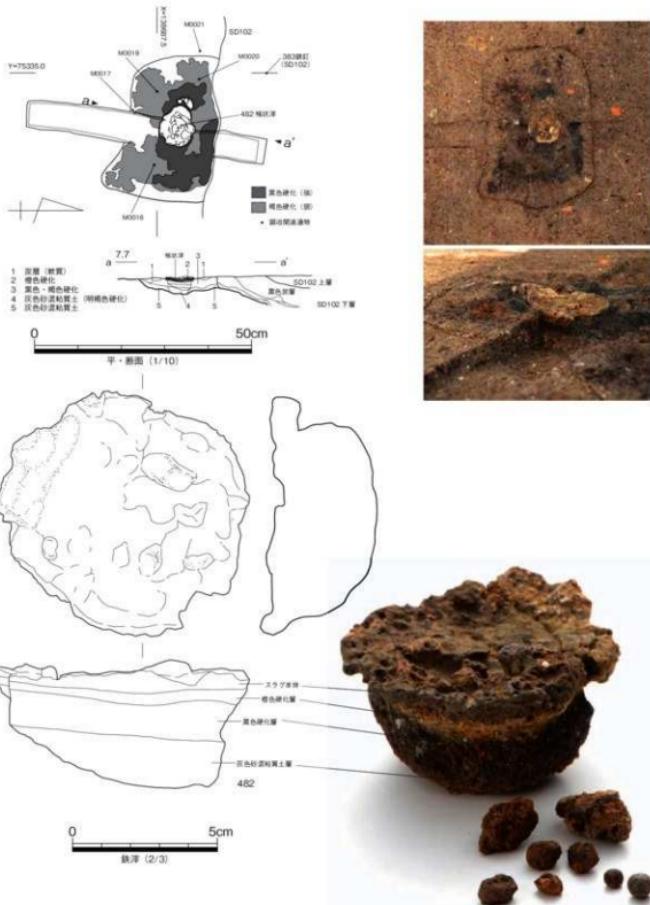


出土地点が判明した粒状滓	会計	137点
	合計重量	54.25 g
	1点平均	0.4g
水流出土を含む全銅滓	会計	597点
	合計重量	77.94g
	1点平均	0.13g

第92図 銅溶解炉 SF101 出土遺物写真・数量分析図

鉄鍛冶炉 SF102

SF101の西1.5m、SD102の南肩部に近接して検出した鍛冶炉である。約30cm×20cmの隅丸長方形の範囲に黒褐色に硬化した面があり、中央に輪形鉄滓が遺存する。すなわち鍛冶炉炉底が原位置で残存し、炉底の形状が維持されたものである。検出当初は硬化層上部には軟質の炭化物層が覆っていた。



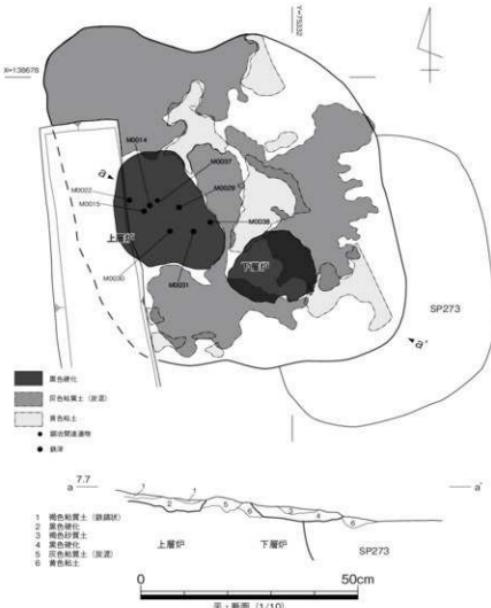
第93図 鍛冶炉SF102 実測図・出土遺物実測図

それを除去すると硬化面は北側がより黒く硬いことから高温で被熱したものと考えられる。また南東隅の硬化面が外側にはみ出すような形状を呈していることから、外形隅丸方形の鍛冶炉の南東部コーナー付近に送風孔が所在し、対する北側が強く被熱した可能性が考えられる。西1.2mにSF108があり、距離関係から当該炉に伴う金床と考えられる。送風孔と反対の位置にあるので、配置的には整合する。

上部炭化物層が北側のSD102に落ち込んだ地点から鉄器（383、SD102で報告）が出土している。また埋土を水洗した結果、4.6 g 分の鉄滓片を回収した。また炉内炭層に炉材粘土溶融物である粒状滓（NIS-5）が含まれていた。

482は遺構より取り上げた楕形鉄滓（分析番号 NIS-1）である。鉄滓の平面は直径8.5cmで上面は木炭痕が薄く点在し、部分的に羽口先端の粘土溶融物と推定される黒色ガラス質滓が付着する。また、1cm 大の鉄粒が付着する。断面で観察すると滓部下位に橙色～黄灰色の真砂土混じりの硬化層が5mmあり、その下位に黒色硬化層が厚さ10mm、これは炉北側から続く土である。その下位には炉底土の灰砂混粘質土がある。底部も含めて取り上げているため本体より重量が増して 233.8 g を測る。

分析の結果、砂鉄起源のチタン・バナジウムは低率で、鉄鉱石系の鍛錬鍛冶滓とされた。それ以外に過共析組織～ねずみ鉄組成の痕跡がみられた。これは鉄滓上面に1cmほどの鉄粒として認められるもので、鍛打のごく初期段階でまとまらずに炉内に取り残されたもの、つまり炉廃絶前に鉄を熱する



第94図 鍛冶炉 SF105 実測図

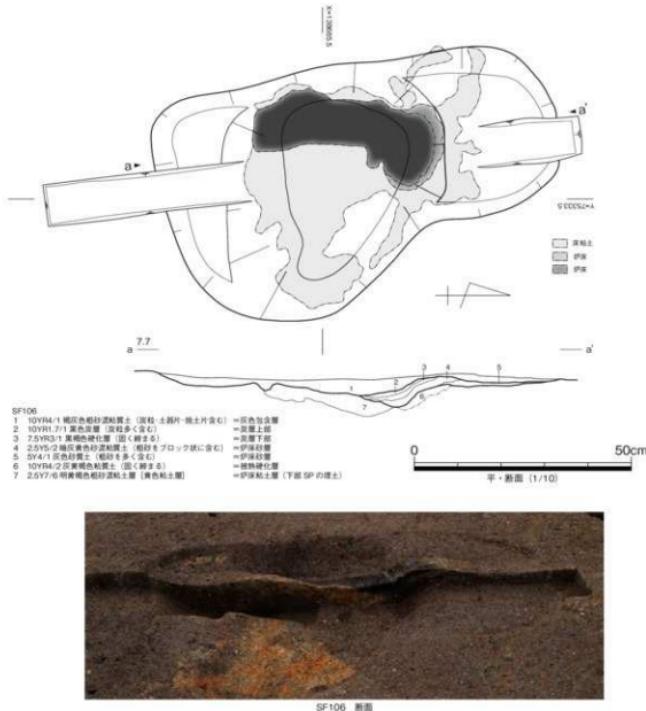
局面があったことを示す。また上述の炉内で出土した粒状滓は炉材粘土溶融物でこれとは別に白鉄鉄の微細な金属鉄粒が含まれていた。つまり鍛錬鍛冶の過程あるいは最終段階で複数回の異なる種類の鉄鉄を鍛冶原料とする高温操作があったことが判明した。あるいは炉の廃絶の要因となった可能性もある。

なお、土器は出土していないが、SD102と同時に存在していたことからSD102と同時期の西村古代4期（11世紀前半新相）である。

鉄鍛冶炉 SF105

掘立柱建物SB102の柱穴であるSP273の機能停止後、柱を抜き取り黄色粘土混じり土で埋め戻し、若干の窪みが残る段階で柱穴掘方の肩に接して鍛冶炉が構築されている。さらにその後も柱穴から若干離れて別の炉がつくれたが、時間的に先行する方を下層鍛冶炉、後出する方を上層鍛冶炉とする。

下層鍛冶炉は直径約15cmの範囲に硬化した黒色土層があり、褐色砂質土がそれを覆う。周囲には褐



第95図 鍛冶炉 SF106 実測図



第96図 鋼冶炉 SF107 実測図

色土と黄色粘土が混在し、南北約70cmの掘方がある。

下層鋼冶炉の機能停止後、炉上部が灰色粘土質で覆われるが、その後その層を基盤として上層炉が構築される。上層炉は長片30cm、短片20cmで多数の鉄滓が出土した。また、第94図M0015の位置で鉄滓とともに長さ約5mmの枠付きの炭化ケイ素1点が出土した。

炉内で出土した2点の微細な鉄滓（NIS-3・4）を分析した結果、いずれも鉄酸化物主体の鉄滓で鉄材を熱間で鍛打加工した時の吹き耗りで生じた微細な鋼冶炉で、粒状を呈するNIS-4はチタン含有が高めで原料鉄に含まれる砂鉄（含チタン鉄鉱）の影響が考えられるものであった。

鉄冶炉 SF106

掘立柱建物SB105の柱穴SP533埋没後の窪みを利用した鋼冶炉である。鋼冶炉廃絶後に流入した灰色包含層を除去するとやや軟弱な黒色炭層があり、その下部に硬化黒色層がある。炉床直上には砂質土や粗砂が介在し、炉の側縁部に硬く縮まった灰黄褐色粘土層がある。硬化黒色層は掘方の西側を中心に南北40cm、東西13cmと細長い形状で遺存しており、約30cm離れた対辺側（東側）に送風孔が所在した可能性がある。合計2.5gの鉄滓片が出土した。

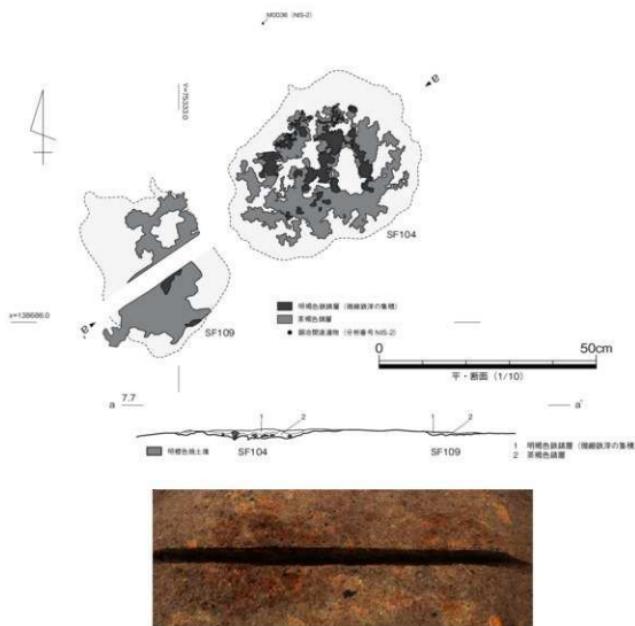
鉄冶炉 SF107

直径20cmの範囲で皿状の黒色硬化層があり、中の窪みには灰色包含層が堆積する。黒色硬化層の外縁には2~3cm幅でやや硬化した褐色粘土質が取り巻く。鉄滓等の出土はなかったが、北側に隣接して10.3gの発泡粘土土（炉壁）、西側25cm離れた灰色包含層中より鉛製水瓶（705）が出土している。

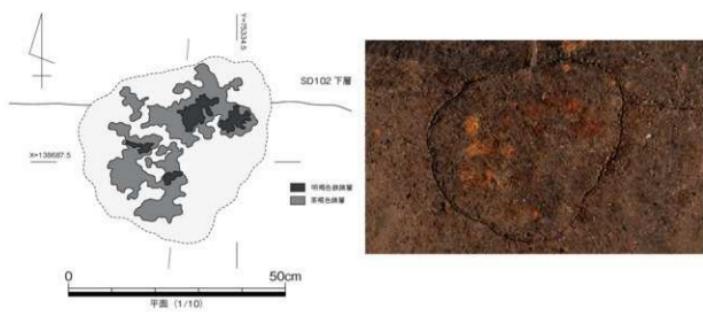
微細鉄滓集中域 SF104・109

鉄冶炉SF105・106に近接した場所で検出した鉄錆状土層の2か所の広がりである。SF104はSF106に、SF109はSF105に近いのでそれに対応する金床の可能性が高い。

SF104は長辺40cm、短辺30cmの楕円形の範囲に鉄錆状土層が広がっており、中央部分には明褐色鉄錆層（鍛造剥片の集積か）、周縁に茶褐色鉄錆層が広がる。錆層の厚みは2cmを最大として薄くレンズ状に堆積し、茶褐色鉄錆層の上位に明褐色鉄錆層が覆う状況である。北側20cmの位置で鉄滓付着の



第97図 微細鉄錆集中域 SF104・SF109 実測図



第98図 錫微細鉄錆集中域 SF108 実測図

炉壁片（分析試料 NIS-2）が出土した。高温によりガラス化し気泡を有す粘土塊で、表面に木炭破片及び鍛錬鍛冶渣が付着する。

SF109 も同様の構造だが、明褐色鉄錆層の分布がやや狭い。

微細鉄滓集中域 SF108

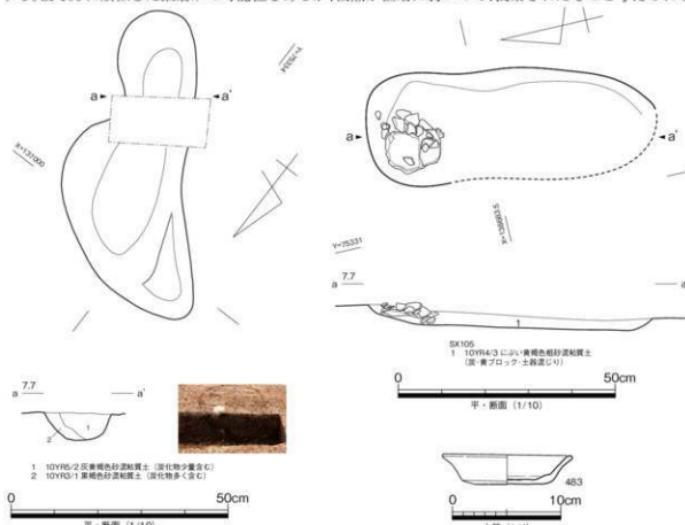
鉄錆冶炉 SF102 に接した場所で検出した鉄錆状土層の広がりである。構造・規模ともに先の SF104 に類似しており、茶褐色鉄錆層の上位に鍛造洞片が詰びて土壤化した明褐色土層が堆積する。なお、SF102 と同様に SD102 と同時併存し、北側は SD102 に向けてやや傾斜して面が形成される。

その他の鍛冶関連遺構

不定形な掘方に炭化物や焼土が投棄された遺構が複数ある。また、柱穴の柱抜き取り後の崖みに、意図的とも思える量の焼土や炭化物が投棄されている遺構がある。いくつかを取り上げて説明する。

SX103

長辺 30cm、短辺 15cm で直角形状を呈する深さ 5cm の土坑である。埋土は灰色包含層と同一の灰黄褐色砂泥粘土質が最終埋没層で、それに覆われてやや硬化した黒褐色土（焼土小塊含む）が皿状に堆積する。SF106 に類似した鍛冶炉の可能性もあるが、被熱が極端に弱いので、投棄されたものと考えられる。



第 99 図 鍛冶関連遺構 SX103 実測図

第 100 図 鍛冶関連遺構 SX105 実測図
・出土遺物実測図

SX105

長辺 68cm、幅 26cm、深さ 6cm の掘方内に炭化物・焼土小塊・土器小片を含む灰色包含層に類似した土壤が堆積する遺構である。北端に土師器杯が投棄される。このように土器と炭化物多数がまとまって投棄される状態は、灰色包含層中においても掘削の最中に気が付いており、土器集中部分として取り上げた第 103 図 500・501 の周囲には図化したような炭化物の集中が伴っていた。

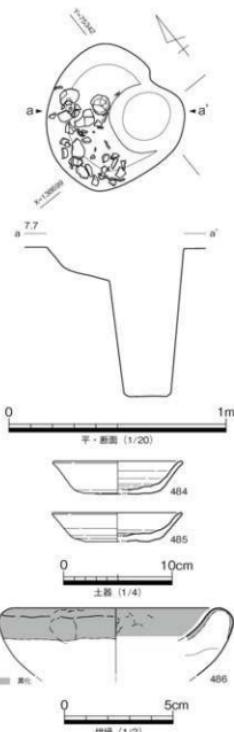
483 は土師器杯である。底部には回転ヘラ切り後の板目圧痕が残り、底縁は丸い。口縁部は斜め上方に緩やかに反転しながら開く形態である（杯 C-2-a）。

(5) 柱穴

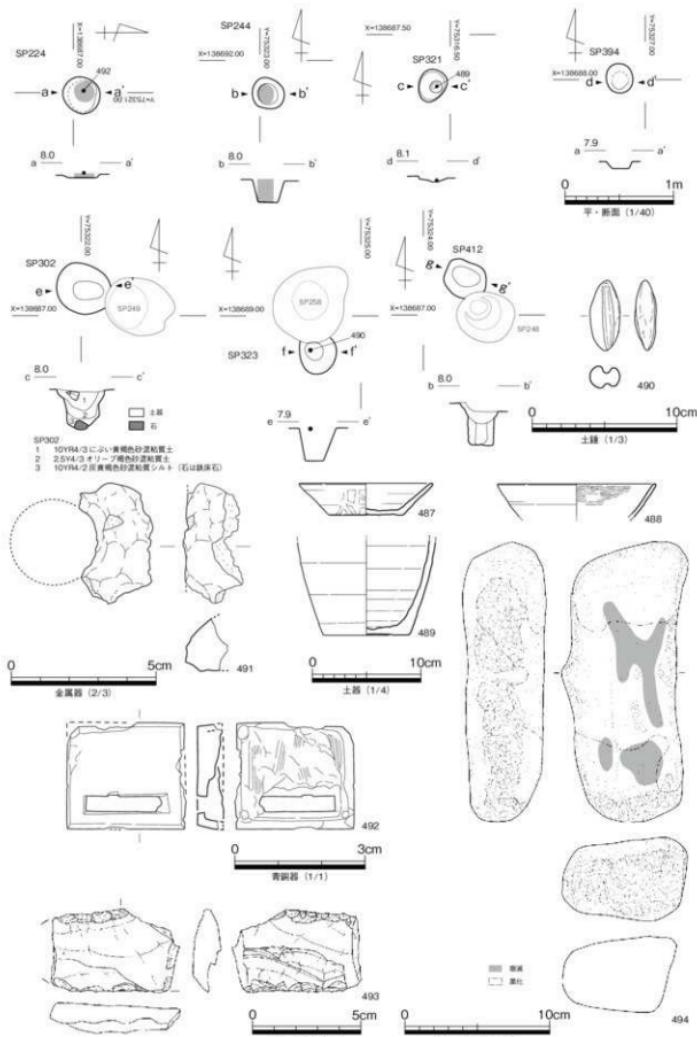
SP496

2 区の北側、SB101 身舎に伴う溝 SD105 と重複する柱穴である。直径 0.35 ~ 0.4 m の小形の柱穴だが、その西側肩部で柱穴内部に斜めに落ち込む堆積層が存在し、土器等の遺物が柱穴の範囲を超えて南北 0.6 m、東西 0.4 m に広がる。柱穴の柱抜取り穴に投棄された遺物とするにはその分布に違和感があるので標高を点検すると、断面図の西側肩部（中端）の標高は 7.48 m で、この付近の断面図に示された SD105 の底場の標高に合致する。そして SD105 を底場まで掘削した後に検出したはずの SP496 の検出標高は 7.63 m と記録されているが、至近の SD105a ラインの検出面は 7.57 ~ 7.60m なので、SP496 周辺では実際には SD105 底場までの掘削が及んでおらず、本来は SD105 を切っていた SP496 の掘削途上でまだ埋没していた SD105 の土器が SP496 側面で見つかり、部分的に SP496 周辺のみを掘り下げて記録されたものと推測する。つまり、SP496 として取り上げられた土器には、当初 SP496 の本来の範囲で出土したものと、その後側面で土器が露出したことで抜き取り穴として調査範囲を広げて本来の SD105 に所属したが当該柱穴出土として取り上げられた遺物が混在する。幸い遺物台帳に日付と層位が明記されているので、486 が初期段階で出土した遺物（10月 8 日）、その後 484・485 が図示した出土状態のように抜き取り穴として取り上げられたものと判明する。つまり後二者は SD105 所属の遺物とみることができる。486 は灰色包含層形成後の 12 世紀以降に所属する可能性も否定できない。

484・485 は口径が 11cm を越え底部が丸味を帯びる器形の土師器杯（杯 C-2-a）である。486 は鍛冶鋳造関連遺物の坩堝片である。口径 10.8cm、現存部高さ 3.1cm で口縁部から体部下半にかけての破片。厚さが約 1.5cm と厚手で灰白色を呈するが内面及び口縁上端 1.5cm ほどが還元状態で灰黒色を呈す。同様



第 101 図 柱穴 SP496 実測図
・同出土遺物実測図



第102図 その他の柱穴実測図・出土遺物実測図

の資料は丸亀市東坂元秋常遺跡IIで出土（報告書には不掲載、本書第172図に掲載した）しており口縁部外面上端1~1.5cmが還元し黒化する点で共通する。また東かがわ市坪井遺跡では口径10.1cmの埴輪（財県理2002dの958）が出土しており内面に金属中の不純物質からなる暗赤紫色の溶融物が付着する。このように通常は内面に溶融物が付着する（奈文研の飛鳥池と山田寺）のだが、当遺跡出土品は内面が還元して黒化するのみで滲の付着がない。これは青銅溶解炉SF101で出土する青銅粒や小青銅板、あるいは近隣で出土した青銅金具片などが高錫青銅で、不純物や鉛等をほとんど含んでいないことに関係するかもしれない。

その他の柱穴出土遺物

その他の柱穴出土の遺物を一括した。487は1区③SP394出土の須恵器杯である。体部が長く直線的に開く形態から綾川町田所深池窯ロスト窯出土品に近く10世紀後半に比定できる。488は1区③SP244出土の黒色土器A類椀である。外上方に直線的に開く体部から椀Bで10世紀後半に比定できる。489は1区③SP321出土の須恵器壺体部である。底縁から直線的に斜め上方に体部が立ち上がる形態から綾川町十瓶山西村遺跡2号窯の形態に近く11世紀中葉に比定できる。490は1区③SP323出土の小形有溝土鍤である。491は同柱穴出土の輪羽口先端部片または炉壁の羽口取り付け部である。表面はガラス化し孔部径は3cmである。492は1区③SP224出土の青銅製帯金具である。透孔にはバリが残り裏面の取付金具は微細のため痕跡しかわからぬが四隅にある。SP224の出土状況を見ると柱穴としての掘り形がほとんどなく、柱痕と認定した中心部から当該遺物が出土していることから、元来は包含層（灰色包含層）に属していたものが銅製品によくある土壤黒化の作用を被ったことで柱痕の変色が生じたものと思われる。したがって、ただちに柱穴出土とは認定しがたい状況である。鉛同位体分析及び蛍光X線分析によると平安期の日本産材料で製作されたものと判明し、その成分分析によると銅87.9%、砒素35.2%、鉛6.28%等で錫が少ない銅合金であった。また緑青の放射性炭素年代測定を行ったが試料純度の関係で14世紀頃という考古学的年代から離れた年代が提示された。裏面には有機物が残存しており電子顕微鏡を用いた物質同定を行った結果、皮革の可能性のある物質が検出された。廃棄時に革ベルトに付着した状態で廃棄されたものである。493はSP412出土の流紋岩製石庖丁である。繰り返し刃部の再調整により刃部はほとんど残存しない。背部は敲打により潰れがある。494はSP302出土の磨石である。大形棒状で側面のトーン部に顯著な磨痕、一点鎖線内は被熱のため薄く黒化する。周縁、特に下端小口に敲打痕がある。493・494は弥生前期の混在品である。

(6) 第1遺構面に伴う遺物包含層

遺構に伴わない包含層出土遺物を報告する。

495~497は弥生土器である。本来は第2面に所属するものが混在したものである。495は壺の頭部中程に刻目貼付突帯文を2条施文する。胎土中に結晶片岩・チャートが含まれており中央構造線以南の地域からの搬入品である。496は甕蓋、497は甕底部である。これらは弥生時代前期に所属する。

498~511は土師器杯である。498・499は円盤高台の杯（杯A）、500・501は底部が平坦で深手となる杯（杯B-1）、502~509は浅手の杯で502~506が底部が平坦（杯C-1）、507~509が底部が丸い（杯C-2）、510はさらに浅手の杯（杯D）、511は高い高台が付く（杯E）。512は大形の高台片で大形鉢の

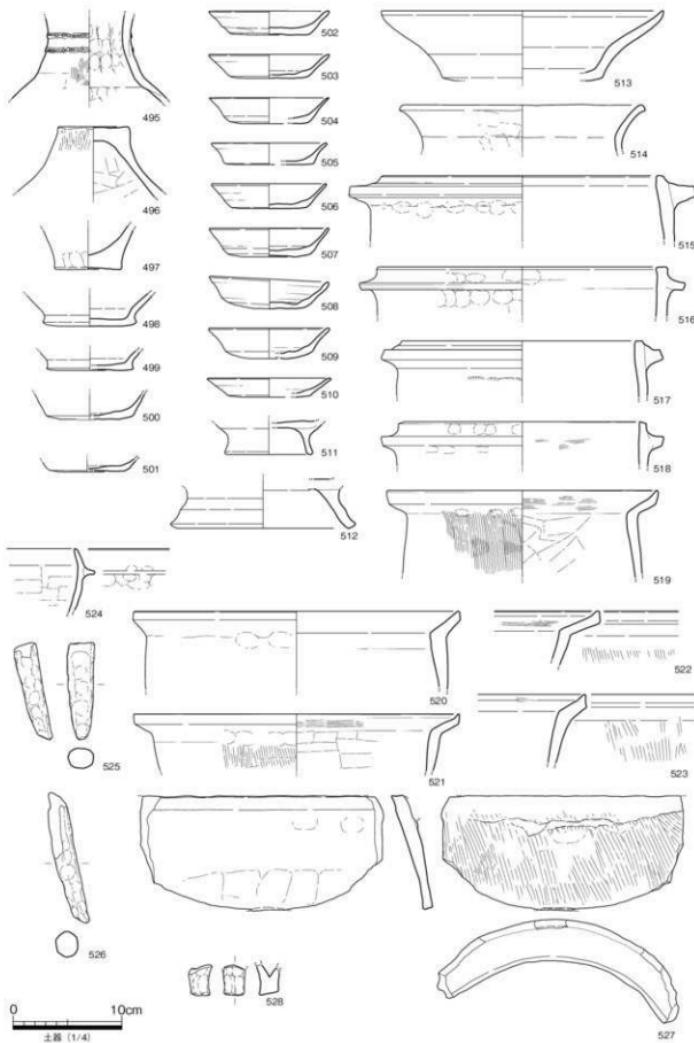
可能性が高い。513は大形鉢の体部である。体部中程で屈曲して外反する。底部は削減のため剥離面の可能性もあり、512のような高台が接続するかもしれない。514は土師器壺である。口縁部が外反する形態で古墳時代の混在品か。515～518は口縁部に断面矩形の鈎が貼付される。519～523は土師器土鍋である。口縁部が屈曲し端部を上方に摘み上げる形状。524～526は土師質土器足釜で中世土器である。527は土師器移動式竈の部材、528は器種は不明だが香炉等の脚と考えられる。

529～549は須恵器杯である。529・530は体部が斜め上方に長く開く特に深手の形態（杯A）、531～537は口径に対して底径が小さく体部が斜め上方に直線的に開く深手の形態（杯B）、538・539は体部の外傾度がBほど大きくなないもの（杯C）に区分できる。541～545は9世紀前半代の混在品。546・547は灰白色を呈す高台杯の須恵器杯である。548・549は古墳時代の杯身。550～552は須恵器皿である。553・554は篠窯系須恵器の碗（註：石井1983の塊A、大阪大学2012の碗Sに相当）である。色調は灰白色系で胎土中に黒色微砂粒を含む。下川津遺跡SD III 05出土の篠窯系須恵器鉢（第1分冊470図19）（註：片桐1992において篠窯系であることが示された）の胎土に類似する。体部下半が直線的に開き内湾し始める点が体部上半にある形態は前山2・3号窯出土の塊A（石井1983）に類似しており、10世紀前半の年代（石井2001）が推定できる。554は底部を回転糸切りし円盤高台とし、高台から体部へ緩やかに反転して接続する形態である。篠窯大谷3号窯出土品の碗Sのバリエーションに含まれる（大阪大学2012掲載大谷3号窯北側灰原下層出土の163）。9世紀末から10世紀初に比定される。

555・556は須恵器鉢である。555は口縁部に沈線1条を施し、体部内外面に強い回転ナデによる凹凸がある。丸龟市郡家一里屋遺跡I区SD13出土の鉢（財県埋1993の400）と共に通する形態・技法である。556は口縁部が屈曲し端部を上方に摘み上げる形態。557～559は東播系須恵器捏鉢である。559は片口部品である。560～567は須恵器甕、568～578は須恵器壺である。579・580は須恵器杯を硯に転用した転用硯である。579は底径11cmを超える大形の高台杯の内面見込み部に顯著な使用痕が残る。580は底径8cmの平底杯の同じく内面見込みに顯著な使用痕が残る。581は古墳時代の須恵器ハソウである。582・583は須恵器ミニチュア壺。

584～594は黒色土器である。584～592が黒色土器A類、593がB類、底部は592だけ高台部で屈曲して斜め上方に立ち上がるが、他はすべて底縁部が緩やかなカーブを呈す。594は黒色土器B類の托上碗である。高台径が小さいが体部との間に断面三角形状の突帯を貼付して托を模す。托部径は9cmと小さい。

595～598は灰釉陶器である。595は灰釉陶器碗で、体部が斜め上方に直線的に立ち上がる形態で11世紀前半の百代寺塚式（山下1995）に属す。596は灰釉陶器深碗の高台から体部下半にかけての破片である。高台は内外ともに内湾気味に斜め下方に踏ん張る形態で、外面下端面は斜め方向に強い回転ナデを施すことにより斜めの端面を生成する。各部棱線は丸く仕上げている。体部下半は回転ヘラ削り調整を施すが、精良素地のため砂粒の起上はほとんどない。内面は重ね焼き痕より上は全面施釉、外面は残存部に幅0.6cmの釉垂れがある。猿投窯跡群の東山72号窯式にあたる広久手C1窯跡資料（松澤・河合1995）に高台形態が類似し、そのうち口径16cmの深碗（註：松澤・河合1995の深碗III類に相当）が法量的に合致する。10世紀後半から11世紀初頭（山下1995）に所属するものである。597は灰釉陶器皿である。口縁部が屈曲して短く外反するいわゆる「折縁皿」で、底部は回転糸切り後に断面三角の



第103図 第1造構面に伴う包含層出土遺物実測図1

高台を貼付する。折縁皿は10世紀後半の猿投東山72号窯式を最後に消滅する器形とされている（齋藤2000）が、東山72号窯式より小振りで、高台が三角形を呈すことなど、11世紀前半の百代寺窯式に近い要素もあり、両様式の中間的な特徴をもつ。598は灰釉陶器長頸壺である。2区③のSD101北端西肩のすぐ西で溝検出面直下で出土した（註：出土レベルを2区北壁断面図に記載している）。断面記録と照合すると、SD101の最終的な掘り込み面の直上の高さとなるので、いわゆる「灰色包含層」の最下部における包含とみておく。体部の最大径が高さの中間点よりや上にあり、底部へは比較的スマートに器形がすばり高台に至る。高台直上では外面が膨らむことがなく、若干の丸味を残す程度である。高台は内湾気味に外下方に短く開く。下端面は内傾し強いナデにより凹面を形成する。器壁は厚く1cmを越え、内面は強いナデにより棱線が巡る。猿投窯跡群では黒錆90号窯式の形態に近く、9世紀後半に位置づけられる。

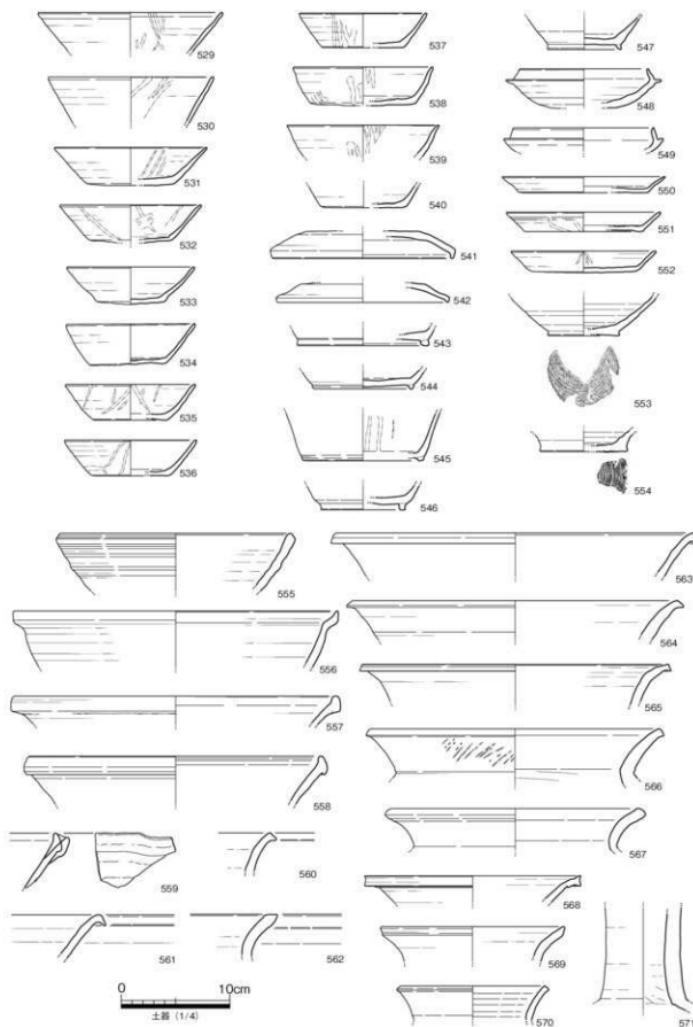
599は綠釉陶器碗である。口径10cmで浅碗の器形を呈す。体部は丸味を帯び口縁部は短く外反する。胎土は淡灰色でやや粗く施釉が大部分剥落し、内面に僅かに淡黄緑色釉が残る。

600～602は中国産輸入青磁である。600は椀口縁部片である。小片だが口径を復元すると19cmとなる。大きく外傾する体部から口縁部が僅かに外反する形態で、口縁端部から下1.5cmまで回転ナデを強く施しナデ棱線が残る。黄緑色の施釉で、口縁外面端部下3mmほどは施釉後のナデで釉剥し露胎する。胎土は淡黄灰色を呈し、密で精良。法量及び釉色から越州窯青磁と推定する。山本信夫2000年分類の椀I-2類に例がある（太宰府市教委2000のI-2aウ）。なお近隣の菅水中筋遺跡では同類ではほぼ同一法量に復元できる底部片（県埋文2017の839）が出土している。8世紀末から10世紀中頃に属す。601は椀口縁部片で、小片だが敢て口径を復元すると約18cmとなる。外傾する体部から口縁部が僅かに外反する形態である。胎土は明灰色を呈し緻密・精良。薄い青緑色の施釉で、透明に近く、貫入が入るが下地の回転ナデの筋目がよく見える。器壁は2～3mmと薄い。施文は残存部位にはみられない。法量と形態から越州窯の可能性もあるが、釉色と胎土は龍泉窯I類碗に近い。602は601と良く似た胎土・施釉の青磁碗である。無文で内面見込みに浅い段が巡る。龍泉窯I類碗であろう。601と同一個体であれば、山本2000分類の椀I-1aにあたる。

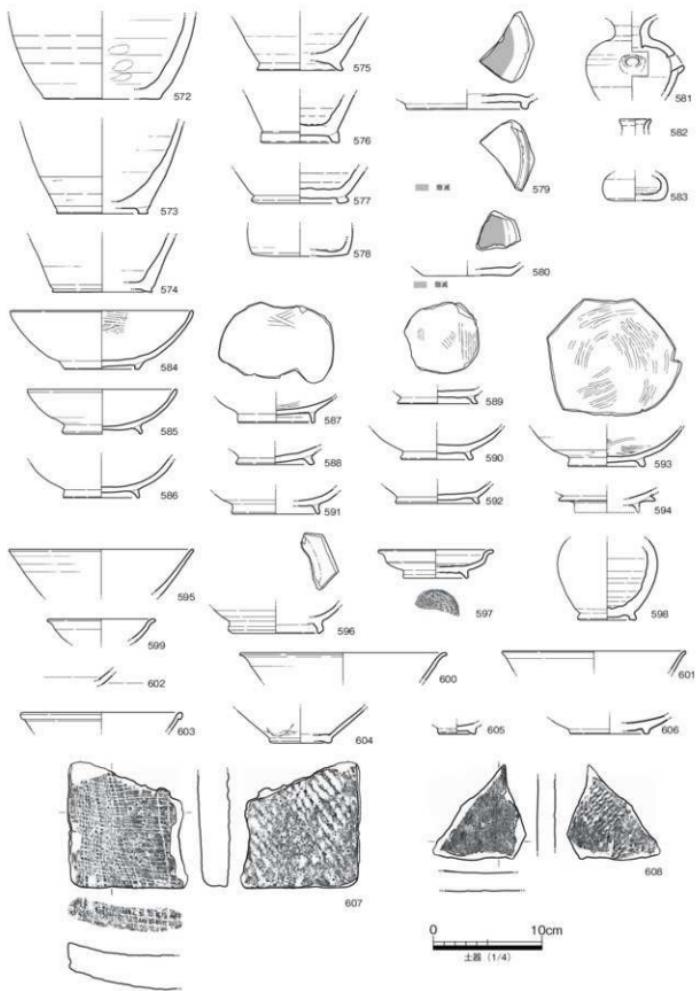
603～605は中国産輸入白磁である。603は白磁碗口縁部片である。口縁は小形の玉縁で体部はやや丸味をもって立ち上がる形態。従来分類（横田・森田1978分類）では白磁II類としていたが山本2000分類では白磁III類として提示されたものに極めて近い。11世紀後半から12世紀前半に属す。604は白磁碗下半部片である。高台は輪状だが薄く低い形態で外面は直だが内面は緩やかな角度の斜面を形成する。高台疊付は手持ちで釉を削り取る。その際のヘラ状工具の当たりが体部下端に三日月状に残る。底部は厚さ5mmと薄手で、体部は斜め上方に直線的に開く。内面見込みに段をもち、段の内側に褐色粒が点在する。胎土は乳白色で粒子はやや粗い。釉は透明に近く貫入が多い。山本2000分類の椀I-4類に当たるが、内面見込みの段がやや新しい要素かもしれない。605は白磁小椀高台部片である。高台は輪状だが薄く低い形態で外面は直だが内面は緩やかな角度の斜面を形成する。底部は厚さ4mmと薄手。全体の形態は不明である。

606は近世の施釉陶器である。

607・608は平瓦片である。607は灰黄色の軟質焼成、厚手で凸面に斜め方向の粗い繩目タタキを施し、凹面と端面の境が棱線を伴わず丸く仕上げ、両所に連続して目の粗い布目が残る。凸面の粗い繩目タタキは11～12世紀の十瓶山産瓦の特徴で、特に凹面と端面の境が棱線を伴わず布目が丸く連続して残



第104図 第1遺構面に伴う包含層出土遺物実測図2



第105図 第1造構面に伴う包含層出土遺物実測図3

る特徴は仁和寺出土瓦との同范関係から 11世紀前半と想定される綾川町小坂池 3号窯出土資料や 11世紀中葉と推定される綾川町十瓶山西村 2号窯出土資料にあることから、11世紀中葉頃と考えられる。608は須恵質で凸面の縄目が細かく、607より古い可能性がある。

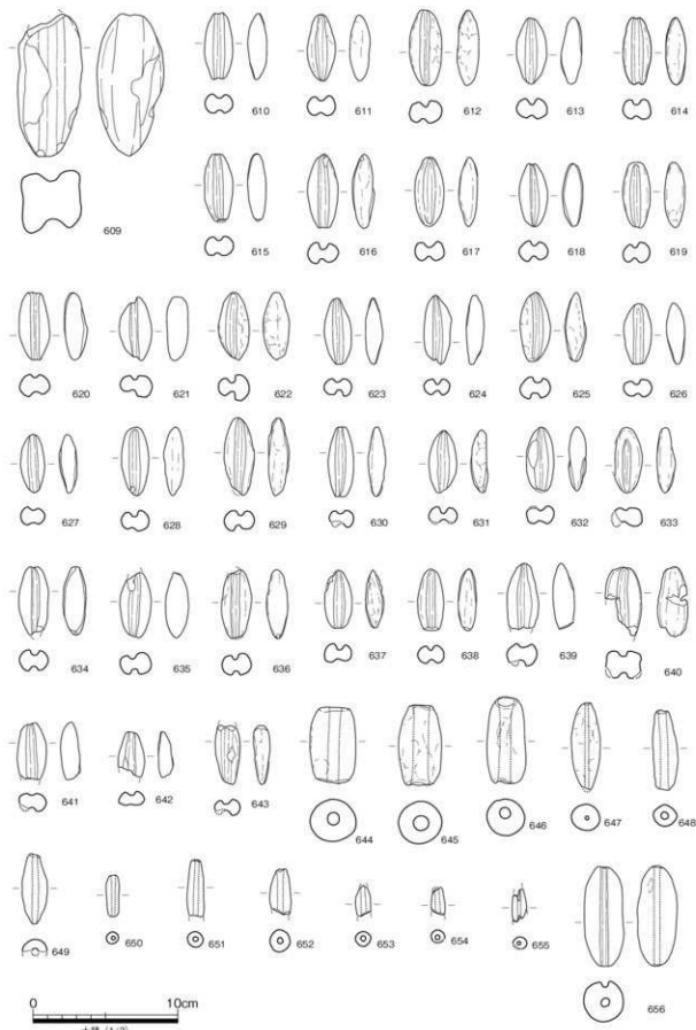
609は大形の有溝土錘である。最小溝幅は 1.5cm (2乗値 L=2.25)。610～643は長さ 4～5cm の小形の有溝土錘で紐掛面を正面とすると側面が丸く膨らむ漸面形状を呈す点で特徴的である。溝幅は 0.6～0.7cm (2乗値 L= 約 0.42) である。644～655は管状土錘、656は管状有溝土錘である。孔径が 0.5cm を越えるもの (644～646 と 656)、それ以下のもの (それ以外) に分けられる。真鍋篠行氏の分類では有溝土錘はすべて Cb 類で袋網系に属し、管状土錘は孔径が 0.5cm を越えるものは袋網系、それ以外は刺網系とされる (真鍋篠 1996)。棒状土錘は完形品が少ないが、657・661・662などが大形に、それ以外は小形に分けられる。刺網系として使用された土錘群とされる。第 108 図に遺構出土の土錘も含めた分布図を示した。有溝土錘 (赤)、管状土錘 (緑)、棒状土錘 (青) ごとに分布をみると、有溝土錘は主に東側、棒状土錘は西側に多く分布する。また、建物専有エリアでは少なく、主に I 区③で SD107 以南の建物以外のエリアに多く分布する。当然のことであるが建物外に廃棄したものであること、土錘の種類ごとに別に置かれていたかあるいは時期が異なるなどのことが考えられる。

692～704は石器である。692～700はサスカイト打製石錐で本来は第 2 遺構面に所属するもの混在である。701は流紋岩製の打製石庵丁である。表裏面が強く磨滅し背部は敲打する。702は安山岩製の砥石、703は流紋岩製砥石である。704は流紋岩製砥石で砥面以外が強く黒化する。詳細に観察すると砥面は研ぎ減りにより表層が取り除かれ、2層目の灰白色層が見える状態で元々は全面が黒化していた可能性が高い。その黒化の在り方は金属器の鋳型によく似ており、小形青銅器の鋳型であった可能性もある。

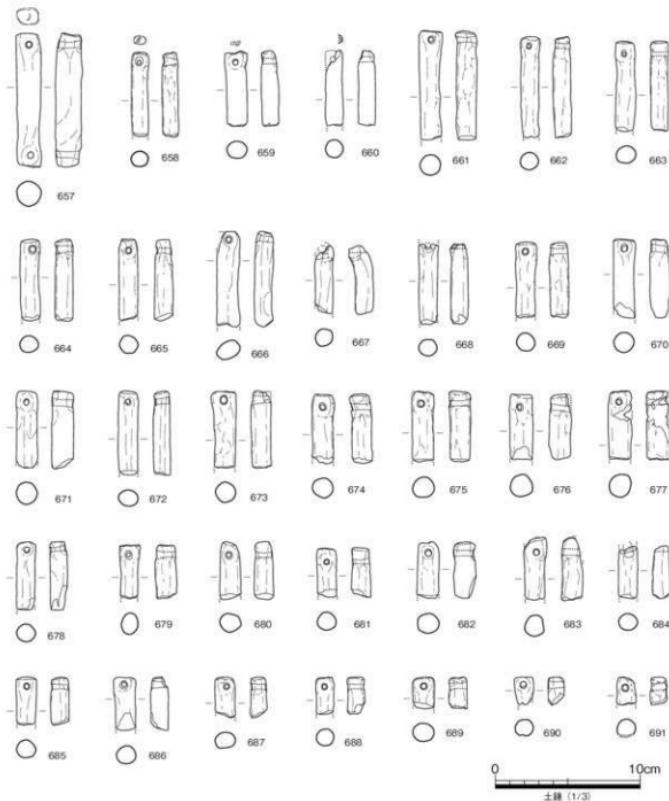
金属器には鉛器、青銅器、鉄器がある。705は鉛器で全体が白く粉状に鋳化し器面に亀裂が生じ一部は亀裂に沿って剥落する。仏花瓶を模した小形品で中心軸が中空となる。鉄芯等に素材を巻き付け高温に熱して成形したものであろうか。鉛同位体分析の結果、208Pb/206Pb - 207Pb/206Pb の A 式図では朝鮮半島領域に入るものの、207Pb/204Pb - 206 Pb/204Pb の B 式図では日本領域に含まれており、素材となった鉛の産地はいずれとも判断しがたいとの結果であった。出土位置は SF107 に極めて近い。706は青銅器で小形の金具状の製品である。図の左側は破損なのかどうか不明で右側に健壮に突出した部分は各面が遺存する。左右非対称であることから飾金具であろうか。構成化学成分の該査では鉛や錫がほとんど含まれない純銅に近い組成である。出土位置は SF101 に近い。707は銅板片である。SD02より西で出土しており分布上 B 群所属の金属器である。周縁が残存せず原形は不明。科学分析は行っていないので、化学成分の組成は不明。

708～717は鉄器である。708は鍛造の鉄素材片で器面に細かなクラックが入る。709は刀子、710・711は煽止金具である。煽止金具は円環金具と巻手の固定金具を組み合わせた建築金具で、710は巻手側が主として遺存し、環内部に円環部の破片が錯着する。基軸は長さ 1.5cm で下端に向かって細くなり、尖端が欠損する。711は円環側の個体で断面方形の棒鉄を左右対称に折り曲げて円環を成形し、残った 2 本の棒鉄を密着させて固定し基軸とする形状で、円環内に巻手の固定金具の環片が遺存する。大きな門扉の煽り防止のための止め具として使用するもので、兵庫県三田市中尾城跡や福井県朝倉城跡などに例がある。(兵庫県教委 1988)。712～716は釘、717は不明鉄板である。

718～729は鍛冶铸造関連遺物である。718～725は楕形鍛冶津で炉底と接する下面と炉内堆積面で

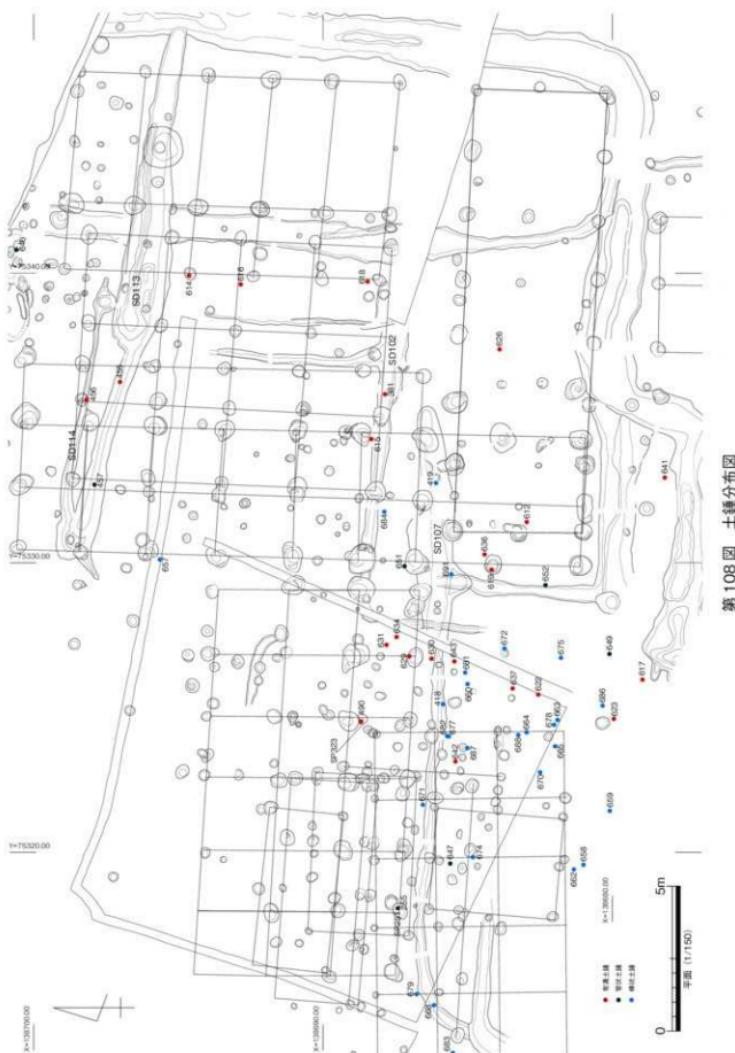


第106図 第1遺構面に伴う包含層出土遺物実測図4

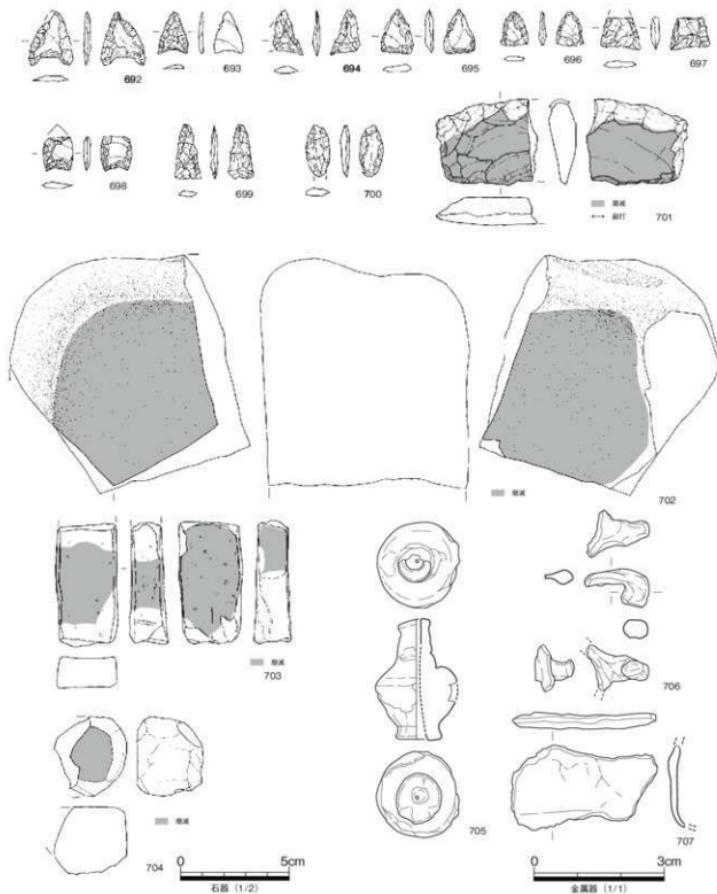


第107図 第1遺構面に伴う包含層出土遺物実測図5

ある上面が遺存するものである。726は厚手の土器片に軽量化した滓が付着する個体である。炉壁の一部かもしれない。727は土器転用取鍋片である。平板様で赤褐色に錆化し表面の一部に銅の緑青粒が残る。当初は鉄滓と考えていたが、科学分析の結果取鍋と判明した。分析に当たって製作された半載サンプルには表面で観察できた銅粒が断面下方まで浸透することがわかり、気泡のある焼き物が変質したものと判明した。また専用容器としての取鍋や坩埚と比べ薄いことから土器を転用した取鍋としている。728は表面が強く流动した状態で内部は気泡が多く、磁着性のない軽量のガラス質滓である。鍛冶炉粘土の溶融物であろう。729は鉄塊遺物である。これらは723・724・727・729が1区③の前述の鍛冶跡



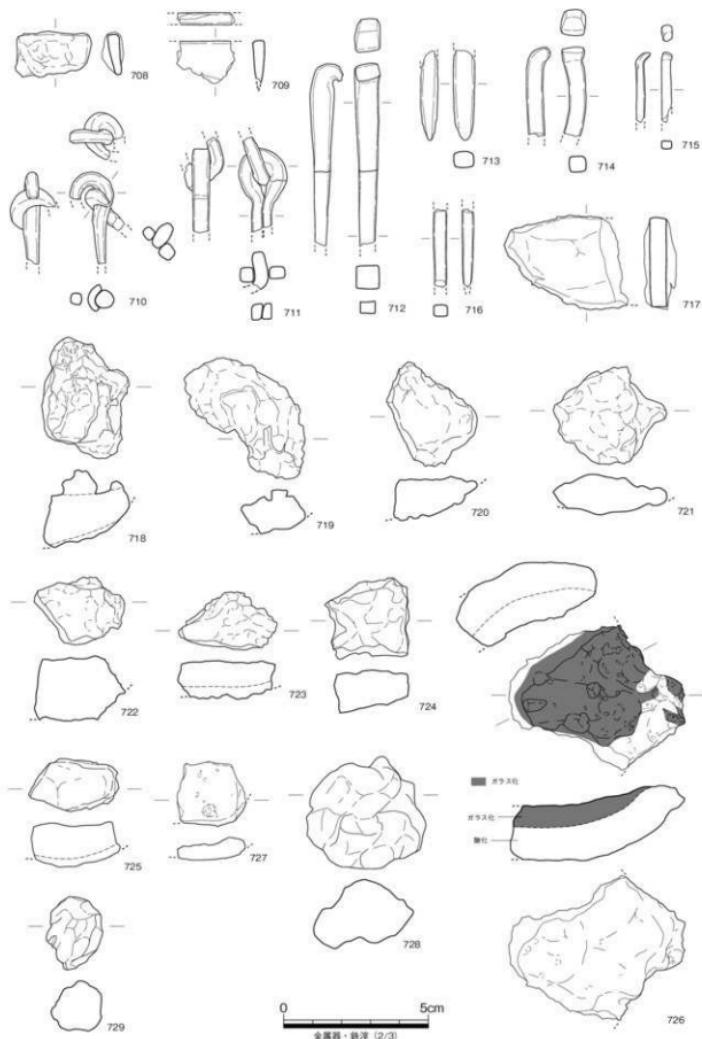
第108圖 土錘分布圖



第109図 第1構造面に伴う包含層出土遺物実測図6

造関係遺構・遺物B群出土で、ほかは同A群出土品である。

なお灰色包含層及びSD105の土壤中花粉の分析を実施した結果、平安期以後はそれ以前の弥生時代前期と比べてイネ科花粉が大きく増加し、ほかにベニバナ・ヨモギなどの有用植物や養蚕用と思われるク



第110図 第1遺構面に伴う包含層出土遺物実測図 7

ワ科がみられるなど、畠地作物と考えられる花粉が少量ながら取得でき、居宅地至近の土地利用が水田・畠地等に変化したことが判明した。

第3節 第2遺構面の調査

(1) 墓穴建物

SH101

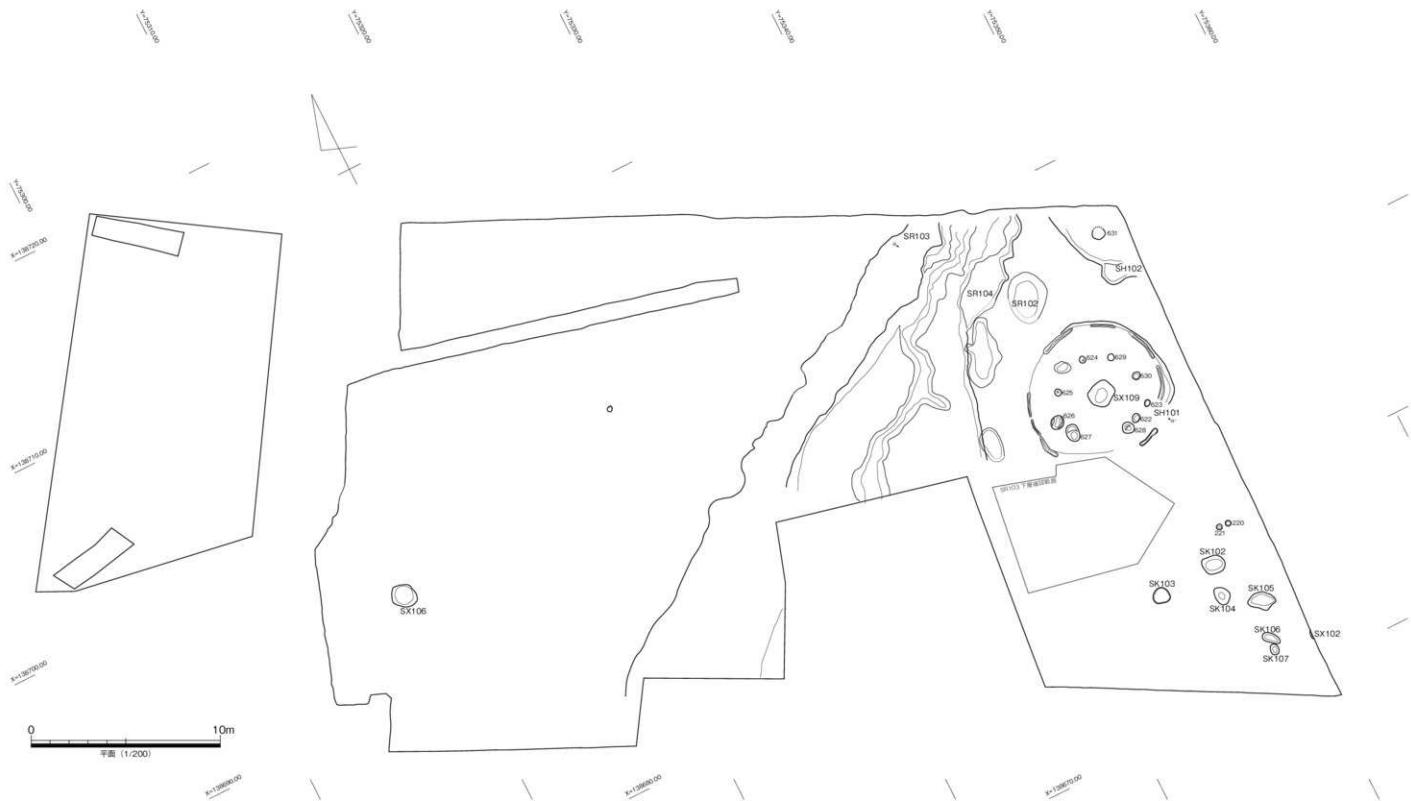
1区①北端から②区にかけて検出した長径7.9×短径7.3mの円形堅穴建物である。後述する河川SR103の堆積層である軟弱な灰白色粗砂層を基盤とする。1区①調査時にはその存在に気付かず、包含層の一部として掘削したが、2区調査において明確な掘り方を確認した。深さは0.2~0.3mで端に幅0.2、深さ0.1mの壁溝が巡り、中央に長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.15mの楕円形土坑が配される。土坑周りに炭化物が散見される。柱穴は多角形配置で恐らく六角形となり、SP624・627やSP628・622など近接する2基の柱穴は、建て替え等に伴う柱の据替が行われたことを示す。このうちSP624・SP625・SP629の3箇所で実際の木柱下端部が遺存した。樹種はSP624出土の柱(767)がサクラ属、SP625出土の柱がアカガシ亜属、SP629出土の柱(768)がクリと多彩な樹種選択指向を示す。SP625出土柱の放射性炭素年代はBC358~281(60.3%)と紀元前4世紀中葉から3世紀前半の可能性が示された。土器・石器等の遺物は床面東側、北側、土坑内においてまとまって出土した。なお、756の皮袋形土器は東側壁溝際で出土したものである。

730~733は壺である。730は口縁部が大きく開く形態の広口壺で頸部やや上寄りに刻目貼付突帯2条を貼付し、口縁端部に沈線及び刻目を施す。外面調整は縱方向のハケ目をやや粗めの横方向のヘラミガキで不完全に消す。内面は頸部内面が横方向、口縁部内面が斜め方向のヘラミガキ調整である。731は口縁部に段をもつ壺の内傾する口頭部片である。粘土帯を口縁部に貼付しその下端を段状に成形する。732は無頸壺である。内傾する体部の外面に半截竹管による直線文、波状文、三角刺突文等を施し櫛描文風効果を示している。

734~749は甕である。口縁部に無文の突帯を貼付する逆L字形の土器が多く、如意状口縁の土器は2点(734・735)のみである。文様はヘラ描き沈線文及び最下端に刺突文を施す。刺突文は三角形ではなく縱長か横長の楕円である。

756は皮袋形土器である。正面形が三角形を呈し表側がやや窪み、裏が膨らむ側面形で表裏形状が非対称の土器片である。下端隅から肩部にかけての破片資料で、肩部は素材の粘土板を丸め、下端部で表裏の粘土を密着するよう平たく接合して成形する。表裏とも外面を丁寧にヘラミガキし、表面下端に直径2.5mmの円形竹管刺突文を上下2段に施す。大陸系の皮袋を丁寧に模倣した土器で、表裏の膨らみ具合や下端の皮縫を模倣した刺突文など、写実的な表現が特徴的である。胎土・色調は他の弥生前期土器と変わりなく、弥生前期に属すもので間違いない。同様の形状は古墳時代の須恵器にあり、弥生時代後期には平底の皮袋形土器が知られるが、弥生時代前期の類例は管見の限り見ることのない希少品である。

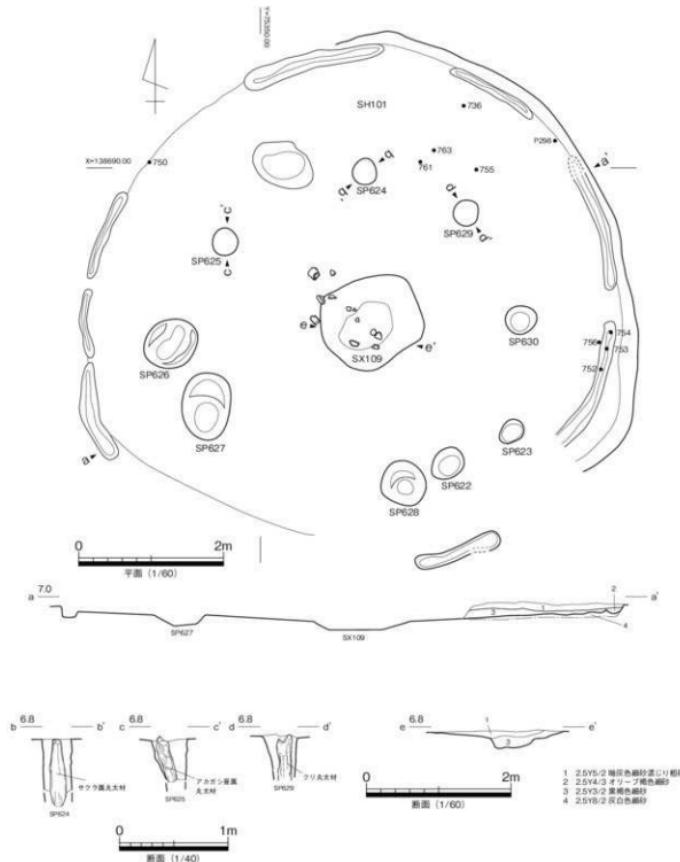
757~759はサヌカイト製の打製石錐である。いずれも3cm以下の小形品で757・758が凹基式、759が凸基式である。760・761はサヌカイト製の石錐である。760は下端作用部の欠損後に再加工を行う。761は下端作用部がハジケ・折損する。そのため2点とも磨滅痕が確認できない。762はサヌカイト製の楔状石核である。側縁から上縁にかけて顕著な敲打痕が残る。763は安山岩製の円錐を分割し便宜的に



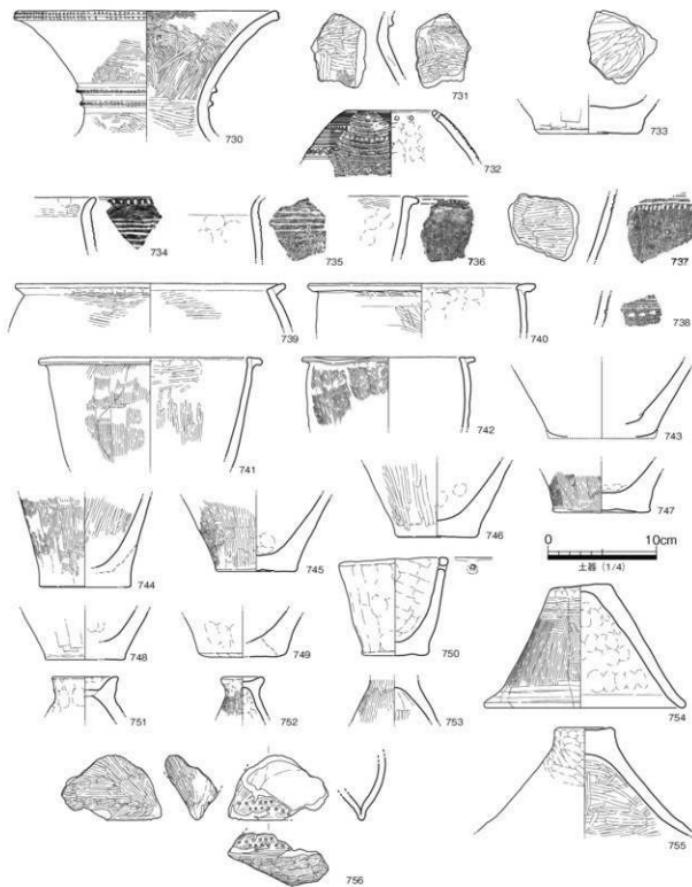
第111図 第2遺構面全体平面図

に付刃したスクレイパーである。764は接合しないが同一母岩の剥片である。径8cmほどの円礫を打ち割って刃器として使用する。765は安山岩製の叩石である。上縁小口にアバタ状、両側縁に線状敲打痕が残る。763・764と同質の石材で磨滅した円礫を素材とする。766は702と同質の石材で多数の白い斑晶に入る安山岩製の叩石である。腹面や小口に敲打痕が残る。

767・768は柱穴内に遺存した芯持ちの柱材基部である。767は直径19.3cmで下端から70cm上まで太く、それ以上は細っている。使用による劣化か。樹種はサクランボ属である。768は下端直径が20.8cm



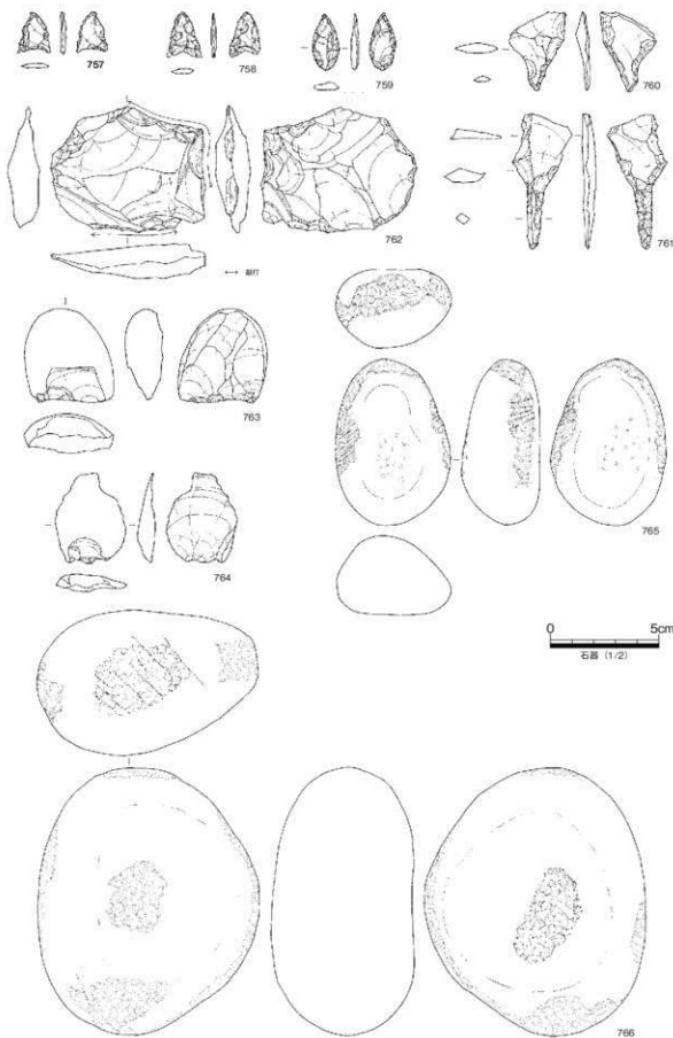
第112図 穴建物SH101実測図



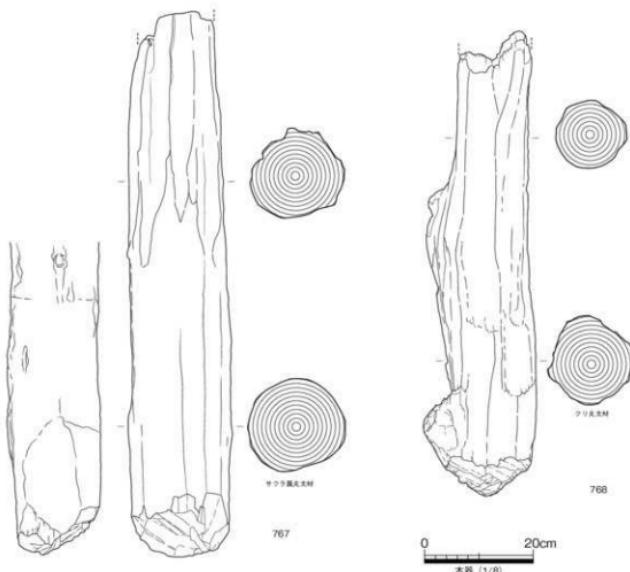
第113図 積穴建物SH101出土遺物実測図1

で60cm上までは直径19cmを維持する。樹種はクリである。このほかSP625出土のアカガシ亜属の柱材は直径15cmの丸太材である。

以上、SH101出土遺物は土器において櫛描文出現以前の様相であることから弥生前期後半新相に所



第114図 竪穴建物SH101出土遺物実測図2



第1115図 竪穴建物SH101出土遺物実測図3

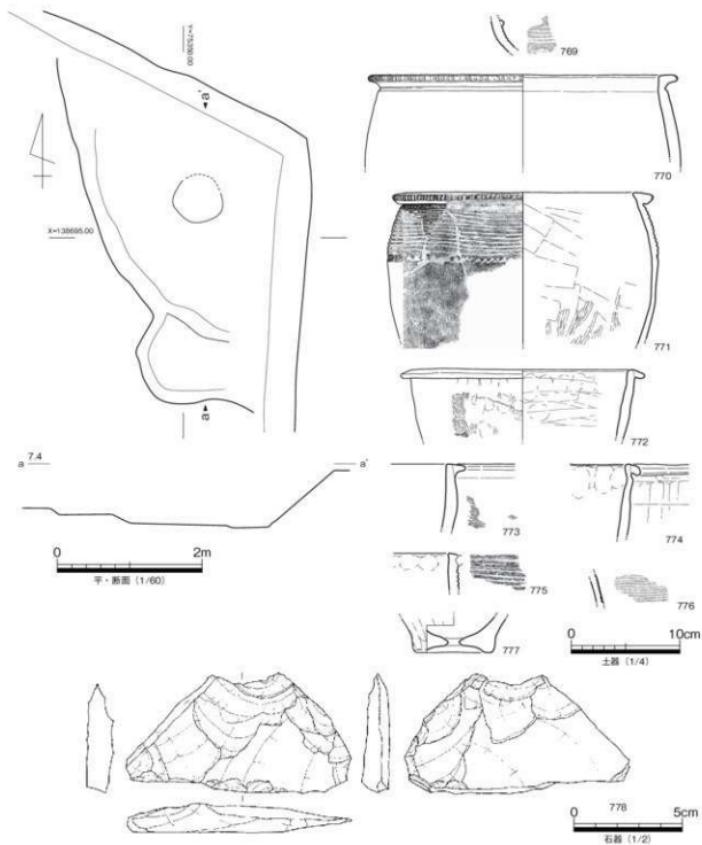
属するもので、遺構の埋没時期を示す。

SH102

2区東隅で検出した竪穴建物の一部である。緩やかなカーブを描く平面形である。南に貼り出しがあるが、形状は不明である。深さは0.2mで全体の規模は不明である。床面に柱穴を検出した。南に位置するSH101とは3mの間隔がある。

769は弥生土器壺頭部片である。断面三角形の貼付突帯1条とその下に4条のヘラ書き沈線文を施する。770～777は甕である。いずれも口縁部に粘土帯を貼付する逆L字形で770・771は凸面上に刻目を施す。770は突帯直下に幅広のヘラ書き沈線を1条施す。771は11条のヘラ書き沈線文を施し下端に三角刺突文を施す。772～774は無文である。775・776は多条沈線の破片で776の沈線は2条一帯の半載竹管による一括施文である。777は甕底部を焼成後穿孔した甕である。778はサヌカイト製の楔状石核である。石核の素材は板状の大形剥片を打撃して同時割れで生じた剥片の上下縁を打面として石鎚等の素材となる剥片を剥取る。

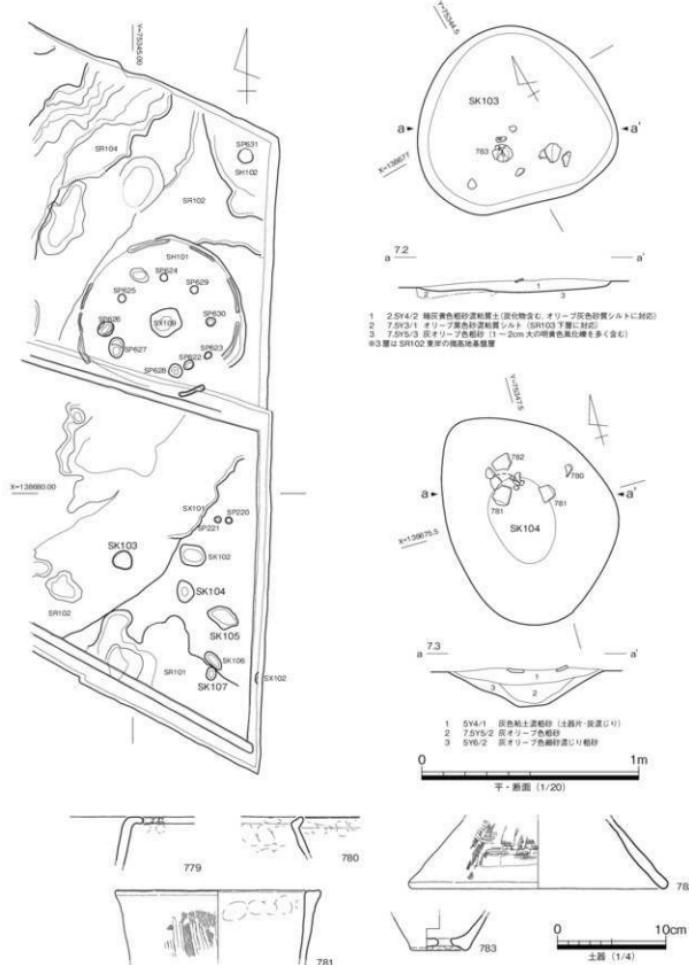
出土した土器は半載竹管を用いた多条沈線があるものの、梯描文導入以前の土器のまとまりで弥生時代前期後半新相に属す。



第116図 積穴建物SH102実測図・出土遺物実測図

(2) 土坑

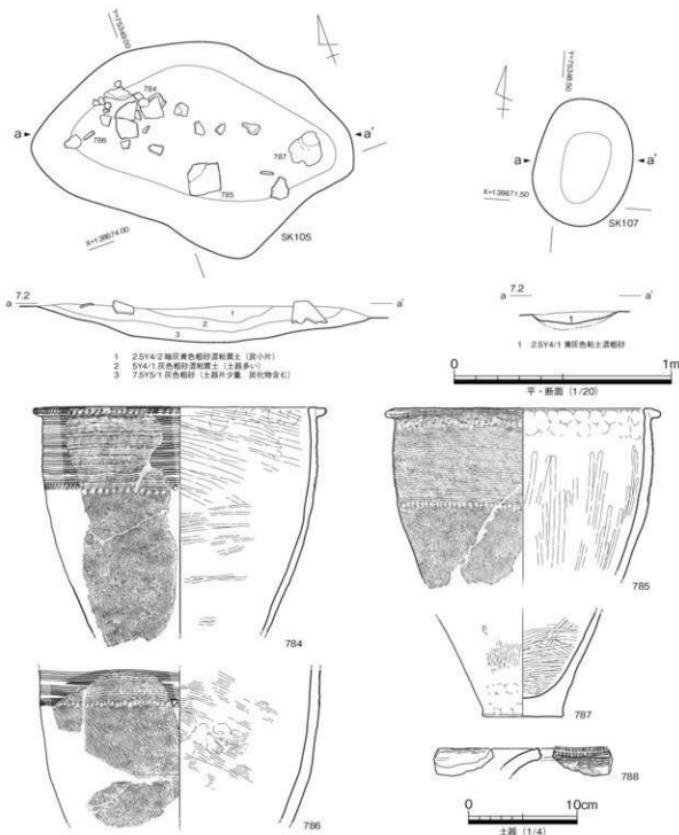
1区①では後述する第2遺構面を覆う包含層の三層の下位に、中央付近では灰白色粗砂を切る暗オリーブ褐色埋土の低地部と、そこから東にやや高くなる微高地部で遺構を検出した。土坑は直径1m内外の大きさで不定形なものが多く、そのうちSK103・SK104・SK105において土器を投棄した痕跡がうかがえた。埋土は深くても0.15mほどで埋土の一部には炭化物を含むが、積穴建物SH101中央土坑ほどの



第117図 土坑分布図及びSK103・SK104実測図・同出土遺物実測図

量ではない。ただ土坑に近接して柱穴2基が確認されており、土坑との距離がSH101とはほぼ同じであることから、未検出の堅穴建物の可能性も捨てきれないが、その場合は主柱穴となり得る柱穴が非常に少ない。

以下、土器が出土した土坑を中心に報告する。



第118図 土坑SK105・SK107実測図・同出土遺物実測図

SK103

0.9 × 0.8 m のむすび形の土坑である。深さは 0.06 m と浅い。埋土は暗灰色系の粗砂混粘質土で炭化物を少量含む。783 は弥生土器鉢である。

SK104

長径 1.03、短径 0.78 m、深さ 0.16 m で断面台形の土坑である。灰オリーブ色粗砂を主体として最上部の 1 層に粘性が含まれ、土器や炭化物もこの層に含まれる。

甕・鉢・蓋が出土した。779・780 は甕で 779 は口縁部を短く水平に折り曲げるもの、780 は粘土を貼付する逆 L 字形である。779 は口縁端部に刻みを入れる。781 は口縁部が肥厚する鉢である。782 は甕蓋の下半部片である。いずれもヘラ描きもしくは櫛描の文様施文部がないが、このうち 781 の鉢は中期に出現する形態の鉢であることから、SK104 は前期後半新相から中期前半古相にかけての土坑である。

SK105

1.5 m × 1.0m、深さ 0.16m の不整楕円形の土坑である。灰色系粗砂を主体に上層ほど粘性を含み、2 層とした中層に土器が最も多い。炭化物は下層の 3 層に多い。土器は甕ばかり 4 点が出土した。

784 ~ 786 の 3 点の甕はいずれも複帶構成の櫛描文で下端部に三角刺突文を施す。弥生中期前半古相の土器である。787 は甕底部である。

中期前半古相に属す土坑である。

SK107

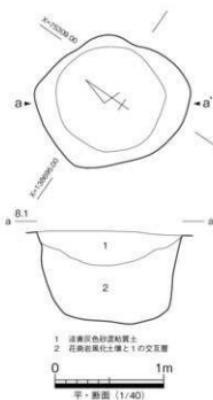
0.58 × 0.45 m、深さ 0.05 m の土坑である。灰色系粗砂で埋没する。壺片が出土した。788 は口縁端部に沈線文 1 条に縦線刻み目を施す壺口縁部片である。

(3) 不明遺構

SX106

1 区④の丘陵裾に相当する位置で検出した。周辺には古代・中世の第 1 遺構面に所属する建物に伴う柱穴等の遺構は全く存在しない。地形を大きく削平された結果とみる。直径 1.45 m、深さ 0.84 m の円筒形土坑である。埋土は上下 2 層に分かれ、下層は基盤層である花崗岩風化土壤層がレンズ状に堆積し、開放状態から少しづつ埋没した痕跡を示す。一方で上層は黄色系の砂混粘質土で一気に埋没した様子が窺える。出土遺物はないが、古代・中世遺構とは色調も土質も異なり、黄色系の古い様相を呈しているので、弥生前期もしくはそれ以前の縄文期に相当するものと考える。

県内高松平野以東の丘陵裾付近の遺跡で散見される縄文期の落し穴遺構の堆積に類似する。



第 119 図 不明遺構 SX106 実測図

(4) 河川

SR103・SR104

1区③から2区北東にかけて花崗岩風化地盤を北東方向に直線的に削削して流れる河川である。幅は調査区内で30mを測るが東側に大きく広がり、古楠谷川とも言える埋没河川である。1区①で下層確認トレンチを設置し最下部を探った。安全措置を施して地表下3.4mまで掘り下げたところで湧水顯著により中断せざるをえなかったが、河川堆積及び滞水状態による堆積がさらに深くまで続くことが判明した。ただ、1区③や2区における下層断面によるとSR103は標高5.4～5.6mの地点で水平堆積に至り、下位に泥炭層を複数枚形成する。この層位までを検出面から流れを辿れるSR103とし、その下位は平面プランが不詳の河川が続いているものとみる。

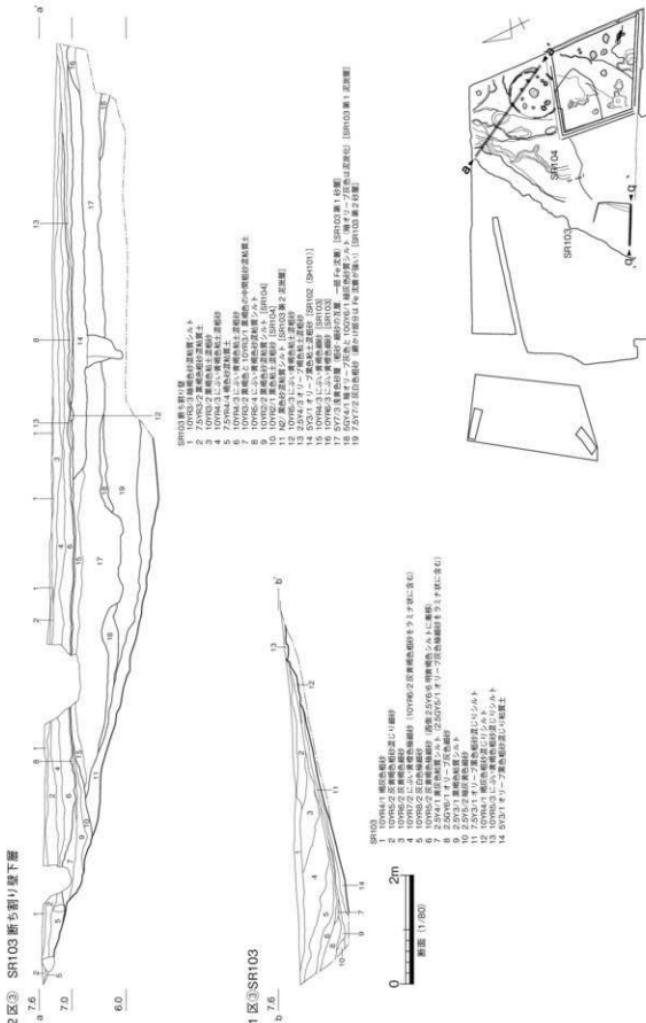
1区①北壁の下層確認トレンチ断面ではその上位の砂層(18層)及びSR103より下位の第3砂層(23層)で前期前半の土器小片が出土した。なお、SR103の下位泥炭層(第2泥炭層)出土の種実ではBC406～366の40年間に絞られる年代が得られている。

花粉分析及び堅穴建物SH101の下位に位置する第2泥炭層出土の種実を分析した結果、居住地として利用される直前の植物相が明らかとなった。最も特徴的な点は花粉分析でクリ花粉が15～20%という高率で出現していることで、周辺はクリ林に近い環境であった。一方で種実同定分析ではクリは全く回収できていないことから、分析担当者は至近の台地等にクリ優勢林が形成されており、種実が堆積しない環境(流下する環境)であったと推定している。「至近の台地等」は西村古墳が立地する北西の埋没尾根がそれにあたるのは間違いない。尾根の南東斜面、日当たりのよいクリが生育するのに適地である。同様の陽樹としてアカメガシワ・カラスザンショウ・タラノキの種実が伴い、ツタなどのつる性植物が絡んでいた植生が明確である。

これらの植物相は堅穴建物が構築された弥生時代前期後半以後、平安期にかけて状況が一変し、それまで8～9割を占めていた樹木花粉が6割程度に激減し、草木花粉が急増する。これはクリ花粉が急減したことが要因である。クリ花粉は広範囲に散布され難い性質があるとされ、至近の植生を反映する。つまり弥生前期後半にそれまでの河川後背地の湿地に厚い洪水砂が堆積して地盤が形成されるとともに尾根のクリをほぼ完全に伐採し宅地及び周辺地の造成を行ったことがこの分析データから判明する。実際にSH101出土の柱の一つはクリ材であった。付け加えて、第2泥炭層でクリの種実が全く得られなかたのは、食用として回収されたために種実が遺存しなかった可能性を考える必要があろう。前期前半期は少々離れた場所で住居を営み、クリ採集地へ通っていたのであろうか。第2泥炭層より下位で土器片が少量ではあるが出土することはこれを傍証するものである。

平安期以後はイネ科花粉が大きく増加し、ほかにベニバナ・ヨモギなどの有用植物や養蚕用と思われるクワ科がみられるなど、畑地作物と考えられる花粉が少量ながら取得できたことで居宅地至近の土地利用を窺い知ることができる。

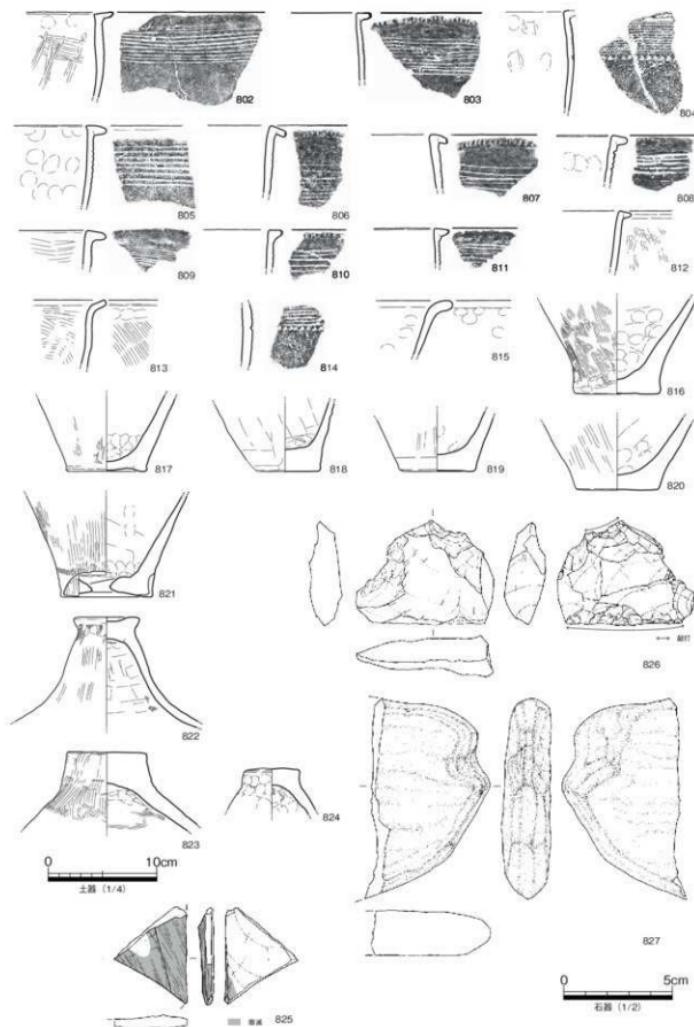
SR104はSR103が最終的に灰白色あるいは黄色系砂層で埋没し、その上面から堅穴建物SH101は構築されるが、その建物の西側縁辺を弧を描くように掘削された堅穴建物周溝のような溝である。幅が1～1.8mで深さは0.5m、SR103のようには河川らしくなく、溝のような形状でかつ部分的には人工的に掘削された可能性がある遺構である。図で計測すると、SH101の北西側に幅約3mの間隔をあけ断面が緩いV字形になるように掘削され、土器の出土が非常に多い。堅穴建物の周溝と考えるのが妥当かも



第120図 自然河川 SR103・SR104 実測図



第121図 自然河川SR104出土遺物実測図1



第122図 自然河川SR104出土遺物実測図2

しれない。

以下主にSR104で出土した土器を報告する。789～796は弥生土器壺である。789は頭部が直立し口縁部が緩やかにカーブして長めに外反する形態で口縁端部に半截竹管による沈線1帯を施文し同じ工具で口縁部内面に山形文を施文する。頭部には16条のヘラ描き沈線文最下端に三角刺突文を施文する。790は頭部に3条の刻目貼付け突帯文を施文する。791は体部上半に櫛描文を施文する。下段の波状文はコンパス状の施文である。792は胴部最大径部直上に7条のヘラ描き沈線文を施文する。793は櫛描による直線文と山形文を施文する。794は肩部ややさがった位置に4条のヘラ描き沈線文を施文する。795は大形壺体部にヘラ描き沈線文を施文する。

797～820は壺である。逆L字形口縁が多く、それ以外のものは798・801が口縁が短く折れるもの、799・813は「く」の字状の口縁で799は外面に粗いハケ目を施し端部に刻目を有する。文様は797・804・809が櫛描、それ以外はヘラによる施文である。815は口縁が如意状に外反する鉢、821は壺底部に焼成後穿孔を施した壺である。822～824は壺蓋である。以上の土器は弥生時代前期後半新相から中期前半古相にかけての土器である。

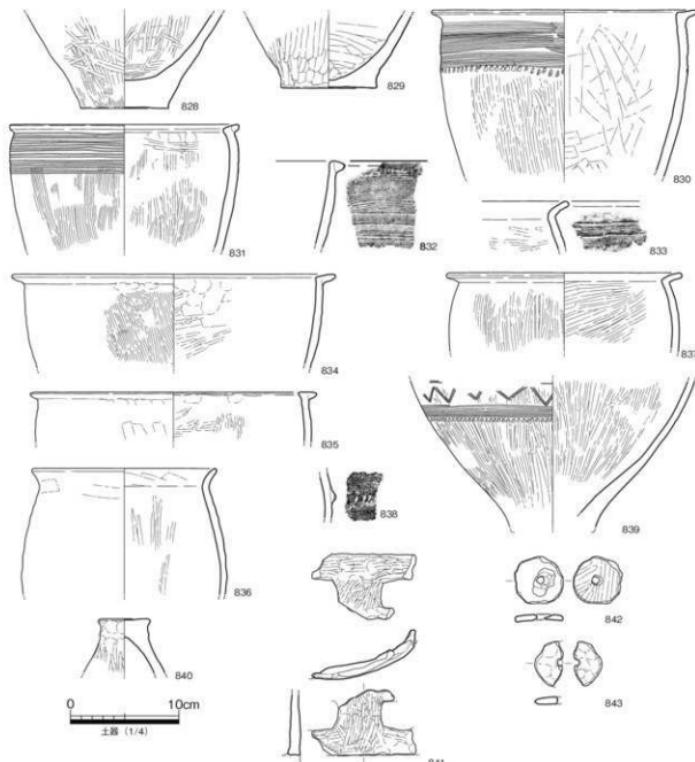
石器は826がサヌカイト製の楔状石核で上下縁に敲打による剥片剥離作業が認められる。825はサヌカイト製の打製石斧で表面及び側縁に顕著な磨滅及び線状痕が認められる。827は頁岩の一部に抉りを施したように見えるが、人工的なものかどうか定かでない。いずれにしても遠隔地から持ち込まれた石材を用いている。

(5) 第2遺構面に伴う包含層

古代以後の遺構の基盤となる堆積層に含まれた土器である。堆積単位は上から順に茶灰色包含層(849・858)、黒灰色包含層(853)、緑灰色包含層(833・836・837・841・845・850・854)、オリーブ灰色砂質シルト層(それ以外)、黄灰色砂層(830・832・844・846・847・848・852・855)、SR03第2砂層(838)、SR03第3砂層(829)となる。このうちオリーブ灰色砂質シルト層が遺構埋土及び第2遺構面土壤化層で出土遺物が最も多い。

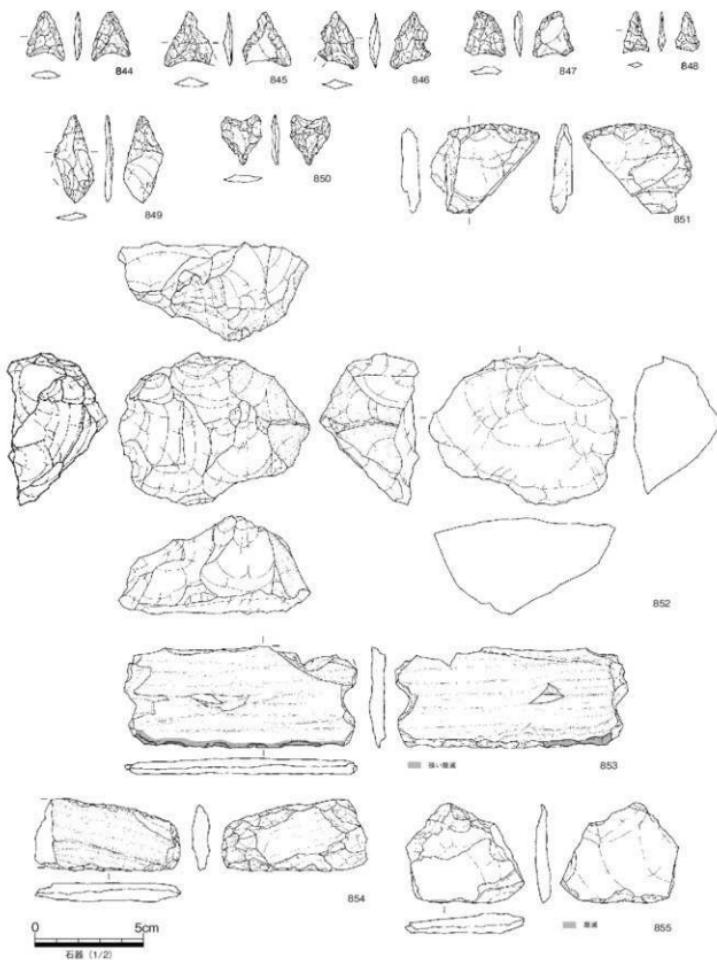
828・829は弥生土器壺である。829は底部が円盤状で内外面調整が幅広い他とは異なる調整工具を使用する。830～833は外面に櫛描文を施文する壺である。833のみ口縁が「く」の字形で他は逆L字形である。834・835は無文の逆L字形壺。836は口縁が如意状外反、837は口縁が「く」の字形となり弥生時代中期前半中相に下る。838は体部に刻目突帯文を施す壺である。前期前半の突帯文系壺である。839は体部下半にヘラ描き沈線文及び半截竹管による山形文を施文する鉢である。840は壺蓋。841は緑灰色包含層で出土した異形土器である。平面は楕円を呈し、底部は剥落、上端(口縁)は僅かに残存する。側面に不整形の透孔をもち、外外面は全面にヘラミガキを施す。楕円で雛型の同様の土器は、縄文晩期突帯文期の林・坊城遺跡流路A最下層(53)で出土している。林・坊城例は透孔ではなく沈線により矩形を表すものである。当該例は縄文系譜の弥生前期土器として位置付けられよう。842・843は土器片転用の紡錘車である。

844～849はサヌカイト製の打製石器である。849は成形途上の未製品で、それ以外は長さ3cm未満の小形品である。基部形状は凹基式で846は側面に抉りが入る。素材剥片の剥離面を残すものが多く、調整加工を完了せずに廃棄されたものであろう。850は石器に似た形態だが、下端作用部を作出するための加工が施されていることから石錐とした。下端自体は折損しており、磨滅の有無は不明である。

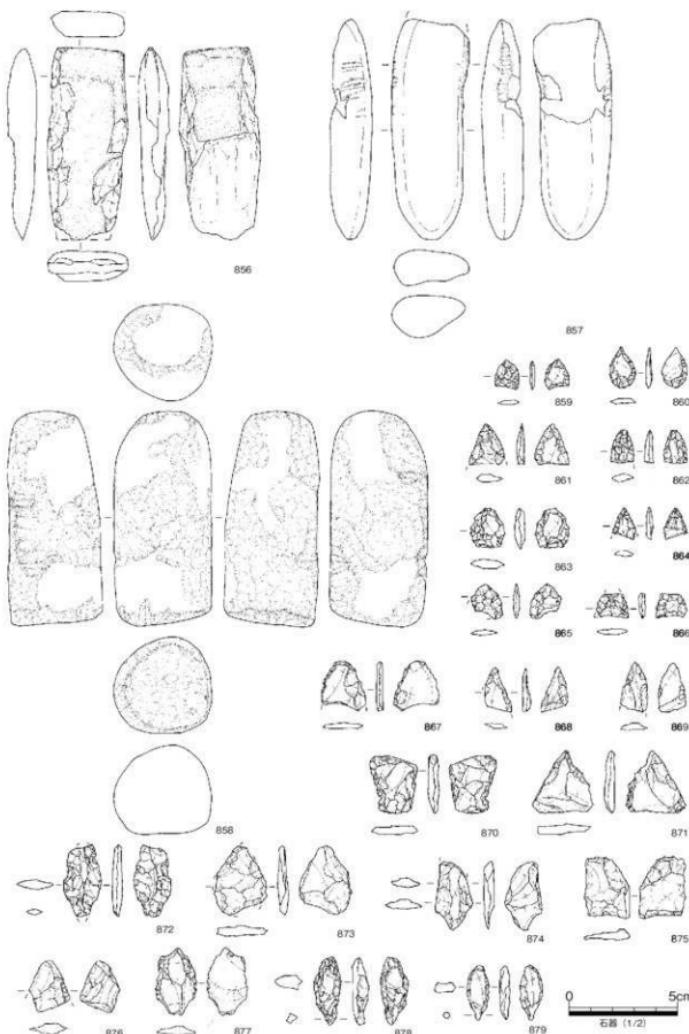


第123図 第2道構面に伴う包含層出土遺物実測図1

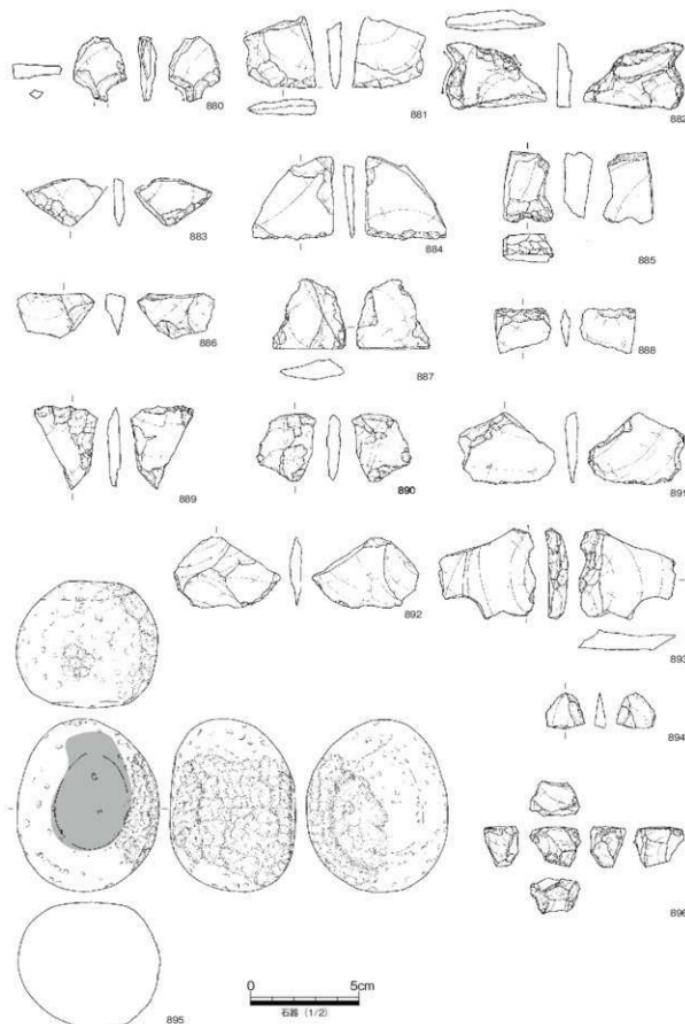
851・852は石核である。851は楔状で上縁に敲打痕を残す。852は塊状で求心状に剥片剥離を進める石核で石材は非金山である。853は打製石庖丁である。緑色味のある結晶片岩製で両端に抉りを入れ刃部に顕著な磨滅が残る。854は緑色片岩製の石斧または石鎌等を再加工したスクレイバーである。図の左面に元の器種の素材面が残り、刃部に研磨が及ぶ。855は黄灰色を呈し風化が進行した流紋岩製石庖丁である。図の左面に原面が残り、刃部に僅かな磨減が認められる。破損後に周縁を敲打しているが形状を再生するには至っていない。856は緑色片岩製の石斧である。図の下端は破損面を部分研磨して刃を作出したもので、原器種は扁平片刃石斧または大形の柱状片刃石斧であろう。図上端は僅かだが面取りを行い破断面への最小限の加工が読み取れる。857は流紋岩製の扁平棒状の叩石である。両側縁に



第124図 第2遺構面に伴う包含層出土遺物実測図2



第125図 第2遺構面に伴う包含層出土遺物実測図3



第126図 第2遺構面に伴う包含層出土遺物実測図4

西村遺跡（香川県埋蔵文化財センター撮影 2019年）

線状敲打痕が残りサスカイト等の打製石器製作工具として使用したことがわかるが石質は軟質でありどの程度有効に使用したか不明である。なお、上端の欠損により廃棄されている。858は硬質砂岩製の円筒棒状の叩石である。ほぼ全面にあばた状の敲打痕が、そして基部側縁に線状敲打痕が残る。特に下端面は平坦に整えられており、石皿と組み合って食料加工等に用いた可能性もある。

859～896は、その他の包含層及び遺構出土の石器で本文中に報告できなかった遺漏分をまとめて掲載したものである。詳細は観察表に記載した。